

主要地方道成田松尾線 X

— 芝山町浅間台遺跡 —

平成12年3月

千葉県土木部

財団法人 千葉県文化財センター

主要地方道成田松尾線 X

しほやま せんげんたい
—— 芝山町浅間台遺跡 ——



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告書第390集として、千葉県土木部の主要地方道成田松尾線改良事業に伴って実施した山武郡芝山町浅間台遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、縄文土器片や円筒埴輪片が出土するなど、この地域の縄文時代や古墳時代の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また郷土の歴史を理解するための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成12年3月31日

財団法人千葉県文化財センター
理事長 中村好成

凡 例

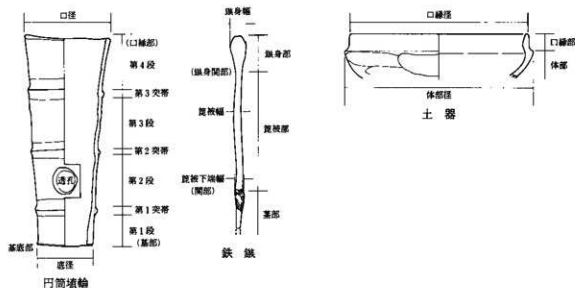
- 1 本書は主要地方道成田松尾線道路改良事業（芝山地区）に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書は、下記の遺跡を収録したものである。
浅間台遺跡 千葉県山武郡芝山町高田字浅間台293-4 ほか（遺跡コード409-025）
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県土木部の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は、調査室長 石倉亮治が第3章第4節2、第4章を、研究員 廣瀬和之が第1・2章、第3章第1節・第2節・第3節・第4節1を担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県土木部道路建設課、千葉県成田土木事務所、芝山町教育委員会の御指導、御協力を得た。

- 1 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

第1図 芝山町発行 1/2,500 都市計画図「芝山町」(17)

第7図 国土地理院発行 1/25,000地形図「多古」(N1-54-19-10-2)

- 2 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による平成11年撮影(1/5,000)のものを使用した。
- 3 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。
- 4 本書で記述及び計測に使用した部位は、次のとおりである。



本文目次

第1章 浅間台遺跡調査の方法と概要	1
第1節 調査の概要	1
第2節 調査の方法	1
第2章 遺跡の位置と環境	9
第3章 遺構と遺物	11
第1節 旧石器時代	11
1 石器集中地点	11
2 石器集中地点外	12
第2節 古墳時代	29
第3節 その他の時代の遺構	37
1 縄文時代	37
2 奈良平安時代から歴史時代	37
第4節 遺構外出土遺物	49
1 縄文時代	49
2 古墳時代	54
3 奈良平安時代から中世	62
第4章 まとめ	65

挿図目次

第1図 遺跡の位置及び周辺の地形 (1/5,000)	3
第2図 調査グリッド配置図 (1/2,000)	4
第3図 北調査区旧石器時代発掘区 (1/1,000)	5
第4図 北調査区遺構分布図 (1/1,000)	6
第5図 南調査区旧石器時代発掘区と石器集中地点 (1/1,000)	7
第6図 南調査区遺構分布図 (1/1,000)	8
第7図 浅間台遺跡と周辺の遺跡 (1/25,000)	10
第8図 基本層序	12
第9図 石器集中地点 出土状況(1) (器種別)と主要石器 (1/80)	13
第10図 石器集中地点 出土状況(2) (石材別)と接合資料 (1/80)	14
第11図 石器集中地点 出土石器(1) (4/5)	22
第12図 石器集中地点 出土石器(2) (4/5)	23
第13図 石器集中地点 出土石器(3) (4/5)	24
第14図 石器集中地点 出土石器(4) (4/5)	25

第15図	石器集中地点 出土石器(5) (4/5)	26
第16図	石器集中地点 出土石器(6) (4/5)	27
第17図	石器集中地点外 出土石器 (2/3)	28
第18図	1号墳実測図 (1/100)	30
第19図	1号墳埋葬施設実測図 (1/40)	31
第20図	2号墳実測図 (1/200), 出土遺物実測図 (1/3)	33
第21図	3号墳実測図 (1/200), 出土遺物実測図 (1/3)	35
第22図	3号墳埋葬施設実測図 (1/40)	36
第23図	4号墳実測図 (1/200), 出土遺物実測図 (1/3)	38
第24図	1号・2号竪穴状遺構実測図 (1/80)	39
第25図	3号・4号・5号・6号竪穴状遺構実測図, 1号土坑実測図 (1/80)	40
第26図	2号・3号・4号・5号・6号土坑実測図 (1/80)	42
第27図	7号・8号土坑実測図 (1/80), 1号・2号・3号溝状遺構実測図 (1/100)	44
第28図	4号・5号溝状遺構実測図 (1/80)	45
第29図	6号溝状遺構実測図 (1/100)	46
第30図	7号溝状遺構実測図(1) (1/200)	47
第31図	7号溝状遺構実測図(2) (1/200)	48
第32図	縄文土器(1) (1/3)	50
第33図	縄文土器(2) (1/3)	52
第34図	縄文土器(3) (1/3)	53
第35図	円筒埴輪(1) (1/3)	55
第36図	円筒埴輪(2) (1/3)	57
第37図	円筒埴輪(3) (1/3)	59
第38図	円筒埴輪(4) (1/3)	61
第39図	円筒埴輪(5) (1/3)	63
第40図	円筒埴輪出土位置図 (1/120)	66

表 目 次

第1表	石器集中地点 器種と石材構成	15
第2表	石器集中地点 石器計測表(1)	16
	石器集中地点 石器計測表(2)	17
	石器集中地点 石器計測表(3)	18
	石器集中地点 石器計測表(4)	19
	石器集中地点 石器計測表(5)	20
	石器集中地点 石器計測表(6)	21
第3表	石器集中地点外 石器計測表	21

図版目次

- 図版1 遺跡周辺航空写真
- 図版2 北調査区遠景
南調査区遠景
確認調査状況
- 図版3 遺構検出状況
旧石器時代土層断面
石器集中地点
- 図版4 1号竪穴状遺構全景
1号墳全景
1号墳埋葬施設検出状況
- 図版5 1号墳埋葬施設掘方
1号墳周溝土層断面
2号墳全景
- 図版6 2号墳遺物出土状況
2号墳周溝土層断面
3号墳全景
- 図版7 3号墳埋葬施設検出状況
3号墳石棺
3号墳周溝土層断面
- 図版8 3号墳鉄鏃出土状況
4号墳, 5号土坑, 2号溝状遺構全景
4号墳周溝土層断面
- 図版9 1号土坑全景
2号土坑全景
3号土坑全景
- 図版10 4号土坑全景
2号~5号竪穴状遺構遠景
2号竪穴状遺構全景
- 図版11 3号竪穴状遺構全景
4号竪穴状遺構全景
5号竪穴状遺構全景
- 図版12 6号竪穴状遺構全景
6号土坑全景
7号土坑全景
- 図版13 8号土坑・1号溝状遺構全景
3号溝状遺構全景
4号溝状遺構全景
- 図版14 5号溝状遺構全景
6号溝状遺構全景
7号溝状遺構全景
- 図版15 石器集中地点 出土石器(1)
- 図版16 石器集中地点 出土石器(2)
- 図版17 石器集中地点 出土石器(3)
- 図版18 石器集中地点 出土石器(4)
- 図版19 石器集中地点 出土石器(5)
- 図版20 石器集中地点外 出土石器
- 図版21 1号竪穴状遺構出土土器・縄文土器(1)
- 図版22 縄文土器(2)
- 図版23 縄文土器(3)
- 図版24 2号墳・3号墳・4号墳 出土土器
- 図版25 3号墳 出土鉄鏃
- 図版26 円筒埴輪(1)
- 図版27 円筒埴輪(2)
- 図版28 円筒埴輪(3)
- 図版29 円筒埴輪(4)
- 図版30 円筒埴輪(5)

第1章 浅間台遺跡調査の方法と概要

第1節 調査の概要

調査の経緯と経過

主要地方道成田松尾線は、新東京国際空港建設に端を発する道路改良事業の一環として、地域開発の推進を目的として計画されたものである。この地方道は、主要地方道成田松尾線のバイパス道路と、新東京国際空港南側を通る国道296号線の山武郡芝山町大里交差点を起点とし芝山町小池を経て山武郡蓮沼村を結ぶ幹線道路としての機能をもつものであり、現在では芝山はにわ道の名で広く開通部分が利用されている。また平成10年には千葉東金道路（二期）の松尾インターとも接続して、その果たす意味がますます大きくなった道路である。

この道路建設に際し、事業地には埋蔵文化財が豊富に所在していたため、千葉県土木部と千葉県教育委員会が協議を重ね、30数か所の遺跡について記録保存の措置がとられることとなった。

浅間台遺跡の調査は、昭和63年9月1日から平成元年1月31日まで、調査対象面積4,700㎡について次の組織及び担当者により実施された。

調査研究部長 堀部昭夫、調査部長補佐 岡川宏道、古内 茂、班長 矢戸三男

調査担当者 調査研究員 新田浩三 調査研究員 渡邊高弘

発掘調査は遺跡の中心に小支谷が入り込むため、便宜上調査区を北調査区と南調査区に分けた。さらに南調査区の半分ほどの面積が作物の残った未売地であったため、北調査区から調査を行った。

発掘調査は、まず北調査区の上層の確認調査が調査対象面積2,250㎡の10%にあたる225㎡について行われた。調査の結果、古墳1基と奈良・平安時代の土坑4基とともに該期の遺物を検出し、遺構の周囲1,120㎡について本調査を行った。次いで下層の確認調査を調査対象面積の4%の面積にあたる90㎡について行ったが遺物は検出されず、下層については確認調査をもって終了した。

次に南調査区の上層の確認調査を調査対象面積2,450㎡の10%にあたる245㎡について実施した。調査の結果、縄文時代前期・中期・後期の遺物、縄文時代竪穴状遺構1基、古墳3基、中世溝状遺構7条、中世土坑・竪穴状遺構9基と該期の遺物を検出し、上層本調査は1,780㎡の面積で行われることとなった。下層の確認調査は調査対象面積の4%の面積にあたる98㎡について行った結果、旧石器時代の遺物集中地点1か所を検出し、210㎡について本調査が行われた。

浅間台遺跡の整理作業は、平成11年4月1日から平成11年9月30日まで以下の組織及び担当者で実施された。

調査部長 沼澤 豊、東部調査事務所長 三浦和信

整理担当者 調査室長 石倉亮治、研究員 廣瀬和之、主任技師 行川 永

第2節 調査の方法

調査区の設定は、調査対象範囲全域を公共座標に応じて地区割りを行い、東西南北に20m×20mの方眼網を設定し、大グリッドとした。大グリッドの呼称法は、北西に起点を置いて、北から南に1、2、

3……とし、西から東へA, B, C……として、これを組み合わせて使用した。大グリッド内は4 m×4 mに25分割した小グリッドを設定し、北西隅を起点に00, 01, 02……として南西隅を44とした。最小グリッドの表記はこれにより、大グリッドと小グリッドを組み合わせて、たとえば、1B23のように表記した(第3図)。

確認調査は、上層では2 m×2 mの確認グリッドを設定し、ジョレンにより遺構確認面まで掘り下げた。下層はこのグリッドを使用し、武蔵野ローム層上面まで掘り下げた。

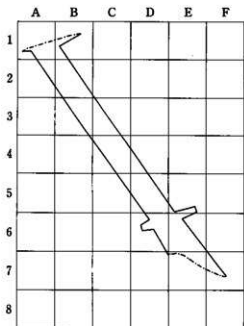
本調査は、上層ではバックホウにより表土を除去し、遺構確認面を露呈させ、ジョレンによる精査後、原則的に土層観察用ベルトを残しながら掘り下げ、後に土層観察を行った。下層は、人手により表土の除去を行い、検出面のⅢ層まで掘り下げた。

出土遺物は、遺構に所属しないものはグリッド名を付して一括して取り上げた。他のものは、可能な限り出土位置を記録して取り上げた。

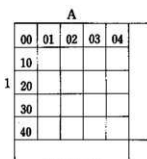
遺構番号は、調査時点において検出された遺構に対して精査を行った順に001, 002……のように一連番号を付した。本報告書作成に当たっては整理作業の過程で明らかになった遺構の種別に応じて新たな番号に振り替えた。



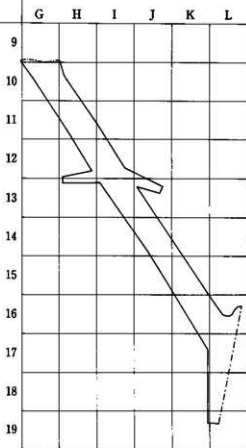
第1圖 遺跡及び周辺の地形 (1/5000)



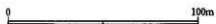
北 区



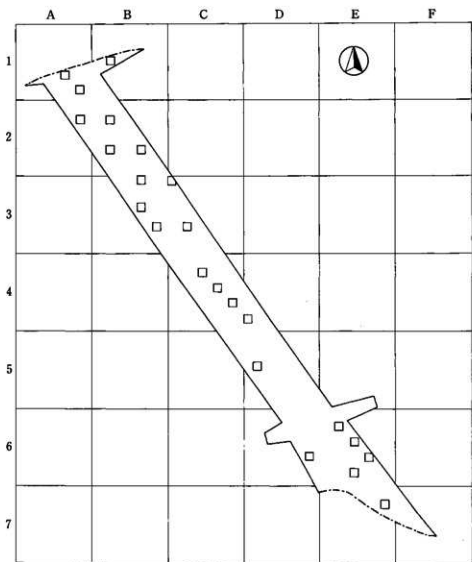
小グリッド



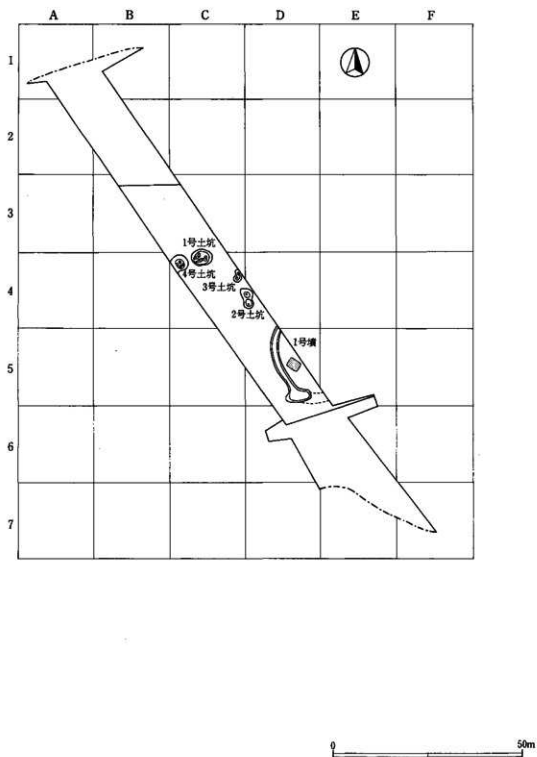
南 区



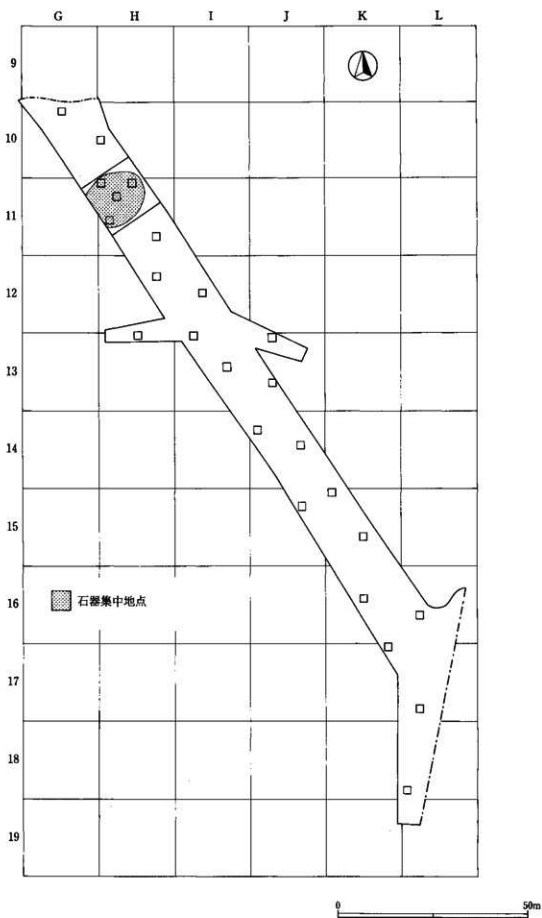
第2図 調査グリッド配置図 (1/2000)



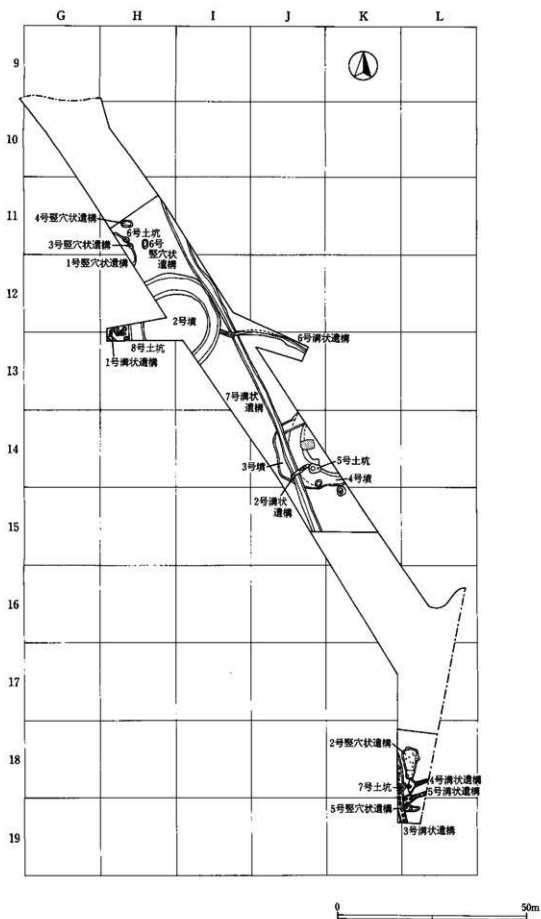
第3図 北調査区旧石器時代発掘区 (1/1000)



第4图 北调查区遺構分布图 (1/1000)



第5図 南調査区旧石器時代発掘区と石器集中地点 (1/1000)



第 6 图 南調査区遺構分布图 (1/1000)

第2章 遺跡の位置と環境

浅間台遺跡は、千葉県山武郡芝山町高田字浅間台293-4ほかに所在する。

遺跡の所在する山武郡芝山町は、千葉県の北東部に位置する。千葉県北東部の太平洋側には海岸長約60kmの九十九里浜が弧状に長く連なる。九十九里浜は波打ち際から台地の縁辺部までの海岸平野部の奥行きが7km~10kmほどあり広範な海岸平野が形成されている。海岸平野内には台地上から流れ出した中小の河川が蛇行しながら太平洋に流入し、その途中で氾濫原、自然堤防を形成している。また、全体的には平坦な海岸平野ながら、汀線とほぼ平行に幾本もの砂丘列の微高地が観察される。

一方、台地からみると山武郡地方は下総台地の南東端にあたる。この海岸平野に連なる下総台地では、新東京国際空港周辺の分水界に端を発する中小河川が海岸平野を経て太平洋に流入し、それらの河川によって台地は樹枝状に開析されている。下総台地の旧印旛郡・香取郡・千葉郡に相当する部分では、河川が印旛沼低地及び利根川に注ぎ、一方、太平洋側では逆方向に河川が併走しており、分水嶺が形成されている。

浅間台遺跡は、木戸川と高谷川に挟まれた台地上に位置する。この二本の河川は、当遺跡付近では支谷を刻み樹枝状の舌状台地を連絡と形成している。水量の多い高谷川に面する斜面は台地奥まで開析し、谷津田と瘦尾根の入り組んだ変化に富んだ地形となっている。一方の木戸川は水量が少なく、その結果台地と河川の比高差も小さく、浸食も浅くて単調な出入りとなっている。本遺跡のあたりで木戸川と高谷川は約1.5kmの距離でほぼ平行に流れているが、台地上の標高は約40mで水田面との比高差は約15mとなっている。周辺の台地には、縄文時代から奈良・平安時代の遺跡が多いことで知られている。縄文時代では、牛熊貝塚¹⁾（後～晩期）、鴻巣貝塚²⁾（中～後期）、木戸台貝塚³⁾（中～後期）などの貝塚が古くから知られている。古墳時代では、国指定史跡の殿塚・姫塚のある芝山古墳群⁴⁾をはじめとする古墳（群）が多く所在する。他に形象埴輪を出土した古墳としては、山田宝馬古墳群にわたり塚古墳⁵⁾、殿部田1号墳⁶⁾などが知られている。古墳時代から奈良・平安時代の集落跡も、小池麻生遺跡⁷⁾、小池向台遺跡⁸⁾、小池新林遺跡⁹⁾、小池地藏遺跡¹⁰⁾、小池元高田遺跡¹¹⁾、井森戸遺跡¹²⁾、宮門遺跡¹³⁾、御田台遺跡¹⁴⁾等の報告によりその内容が徐々に明らかになってきている。また、沖ノ台Ⅱ遺跡では古式の箱形製鉄炉が、沖ノ台遺跡Ⅰでは鑪の羽口と鍛造薄片を伴う遺構がそれぞれ検出されており、両遺跡の関わりが注目される。

- 注1 清水潤三 1954「千葉県山武郡牛熊貝塚」『日本考古学年報7』日本考古学協会
 2 横芝町史編纂室 1975「1952年鴻巣貝塚調査」『横芝町史』
 3 清水潤三 1959「千葉県山武郡木戸台貝塚」『日本考古学年報12』日本考古学協会
 4 滝口 宏 1956「千葉県芝山古墳調査速報」『古代』第19・20号 早稲田大学考古学会
 5 1957 芝山はにわ博物館・早稲田大学考古学研究会調査
 6 坂井利明 1966「千葉県横芝町高田1号墳発掘調査概報」塔形第1集 本郷学園
 7・8 萬崎博昭他 1983「主要地方道成田松尾線Ⅰ」御千葉県文化財センター
 9 奥田正彦他 1985「主要地方道成田松尾線Ⅱ」御千葉県文化財センター
 渡邊高弘他 1992「主要地方道成田松尾線Ⅲ」御千葉県文化財センター
 10 奥田正彦他 1985「主要地方道成田松尾線Ⅳ」御千葉県文化財センター
 11・12 伊藤智樹他 1986「主要地方道成田松尾線Ⅴ」御千葉県文化財センター
 13 平岡和夫 1974「宮門-千葉県山武郡芝山町宮門遺跡調査-」芝山町教育委員会
 宮 重行他 1991「主要地方道成田松尾線Ⅵ」御千葉県文化財センター
 14 新井頼二他 1986「千葉県芝山町御田台遺跡」芝山町御田台遺跡調査会
 奥住 淳 1997「御田台遺跡」御山武郡市文化財センター
 山口直人 1997「芝山町内遺跡発掘」調査報告書 芝山町教育委員会

- 1 浅間台遺跡
- 2 山田宝馬にわたり塚古墳
- 3 山田宝馬古墳群
- 4 沖ノ台I遺跡
- 5 沖ノ台II遺跡
- 6 井森戸遺跡
- 7 宮門遺跡
- 8 小池麻生遺跡
- 9 小池地蔵遺跡
- 10 小池新林遺跡
- 11 御田台遺跡
- 12 小池元高田遺跡
- 13 小池向台遺跡
- 14 芝山古墳群
- 15 鴻巣貝塚
- 16 木戸台貝塚
- 17 牛熊貝塚
- 18 殿部田1号墳



第7図 浅間台遺跡と周辺の遺跡

多古（建設省国土地理院発行）



第3章 遺構と遺物

第1節 旧石器時代

1 石器集中地点（第9図・第10図・第11図～第16図，第2表(1)～(6)，図版15～図版19）

浅間台遺跡では、旧石器時代の石器集中地点が1地点で検出された。集中地点は、南調査区の北西端にあり、ちょうど木戸川に合流する小支谷の谷頭縁辺部の平坦面に立地する。黒曜石を用いた小型尖頭器を主体とし、小型石刃製のナイフ形石器を伴った良好な石器集中地点である。尖頭器13点、ナイフ形石器2点を含む244点の石器が出土した。

石器集中は南北6m，東西10mの密集地点を中心に径約16mの範囲に広がる。出土層位は垂直分布図の観察からⅢ層上半に集中することがわかる。調査時の所見では、石器群の一部は耕作土中からも検出されているようである。

器種別の分布には若干の偏在性が認められる。使用痕のある剥片が石器集中の東側に、尖頭器・ナイフ形石器が西側にやや集中して分布している。石器の密度も東側が低く、西側が高いという傾向も器種の偏在性と無関係ではないと思われる。石材別の分布も、一部の石材において東西の地区でやや分布状況が異なる。安山岩類と珪質頁岩類が西地区に黒曜石E・F・Gが東地区に偏って分布している。接合関係については、狭い範囲に石器群が集中している割にはやや離れた石器同士の接合が確認できる。

出土石器 尖頭器13点、ナイフ形石器2点、石錐1点、使用痕のある剥片27点、調整痕のある剥片2点、剥片153点、砕片40点、石核1点、礫・礫片5点の総点数244点が出土した。

尖頭器は、素材剥片の主要剥離面に調整を加えない片面加工のもの、あるいは若干の基部・先端部の調整が施された半両面加工のもの（第9図・第11図1・4・7・8・9・10・12・第12図15，図版15）と両面に整形打を加えたもの（第9図・第11図2・3・5，図版15）の大きくは2種類のタイプがある。基部の形態は、余り尖らず、やや丸み帯びたものと素材剥片の打面を残すものがある。前者は両面加工のものが目立ち、後者は片面加工のものが特徴的であるとともに、抉られるような調整により基部にくびれともつものがある。10の1点だけが安山岩Aを用いているが、他はすべて黒曜石で占められる。

ナイフ形石器は2点出土した。第9図・第11図13，図版15は小型の石刃を素材として二側縁に調整を施し、優美な柳葉形に仕上げている。14は13と比べてやや分厚い素材を用いて、左側面には背腹両面から急角度調整を、右側縁基部側には腹面側から調整剥離が施されている。利用石材は両者ともに珪質頁岩Aである。

石錐は1点出土した（第9図・第12図16，図版15）。2か所あるいは3か所の突出部を作り出している。調整痕のある剥片は、剥片の形状を意識的に変形しようとしたものと思われるものについて抽出した。自ずと調整痕は大きい剥離痕として残る（第12図17・18，図版15・図版16）。

使用痕のある剥片は27点と多い。いわゆる刃こぼれ状の微細剥離痕の観察される資料を抽出した。分布については先に指摘したように石器集中に東半分集中する。

石核（第9図・第12図25，図版16）は打面を移動することによって、3面の剥片剥離作業面を残している。作業面を打面に設定している点も観察される。

接合資料は、剥離面同士の接合例（第10図・第12図19～24、図版16）と折断面同士の接合例（第10図・第11図11・12、図版15、第16図80～83、図版19）がある。

利用石材 石材の構成は黒曜石が圧倒的に多く、244点中209点を占める。その他に、珪質頁岩15、安山岩13、凝灰岩2、メノウ1、砂岩2、片岩1、不明1点がある。

黒曜石はその特徴からA～Kの11種類に大別した。

黒曜石Aは雲状に乳灰色が混じり、全体的に灰色帯びる。透明感はなく斑晶が若干含まれるが、それほど多くない。自然面は平坦な角礫風化面構成される。黒曜石Bは透明感はなく、淡い均質な縞状の濁りが一部観察される。分厚い資料では漆黒を呈している。斑晶は黒曜石Aに比較して多い。黒曜石C～Dは全体に鉛色を呈したものである。黒曜石Cは透明感があるが黒い縞が特徴で、黒曜石Dは淡く濁った資料で黒い縞も見られ、透明感はない。黒曜石Eは不純物をほとんど含まず、鉛色の透明感が特徴である。黒曜石Fは霜降り状に淡い灰色が混じる。透明感はなく、斑晶が若干多い。黒曜石Gは霜降り状に明るい灰色が混じり、透明感はない。黒曜石Fに比較して斑晶が多いため、剥片剥離面は粗い状況を示している。黒曜石Hは全体的にくすんでおり、被熱によって変質したものである可能性が高い。黒曜石Iは透明感がなく、灰色が縞状に入る特徴的な資料である。黒曜石Jは淡く霜降り状に明灰色が混じるが、黒曜石Gと比較すると斑晶が少ない。黒曜石Kは表面に光沢がなく、淡い灰色を呈した資料である。

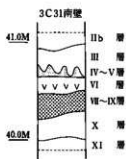
珪質頁岩は、所謂、チョコレート色を呈した資料については珪質頁岩Aとして大別している。

安山岩は2種類に大別した。安山岩Aはいわゆるガラス質黒色安山岩、安山岩Bはトトロ石と総称されているものを示す。母岩分類は困難である。

2 石器集中地点外（第17図1～10、第3表、図版20）

上層遺構内や遺構精査時に出土したグリッド一括資料の中から、旧石器時代に属すると思われる資料を抜き出した。一部剥片類については縄文時代以降に属する可能性もある。

第31図1は安山岩製のナイフ形石器である。断面三角形の縦長剥片を素材とし、先端左側面と基部端に調整を施している。4は使用痕の認められる珪質頁岩製の石刃である。剥片類は幅広のものが主体を占め、礫面を残すものが目立つ。



第8図 基本層序

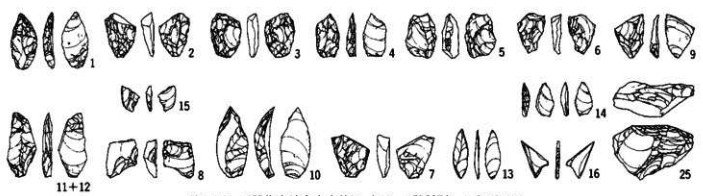
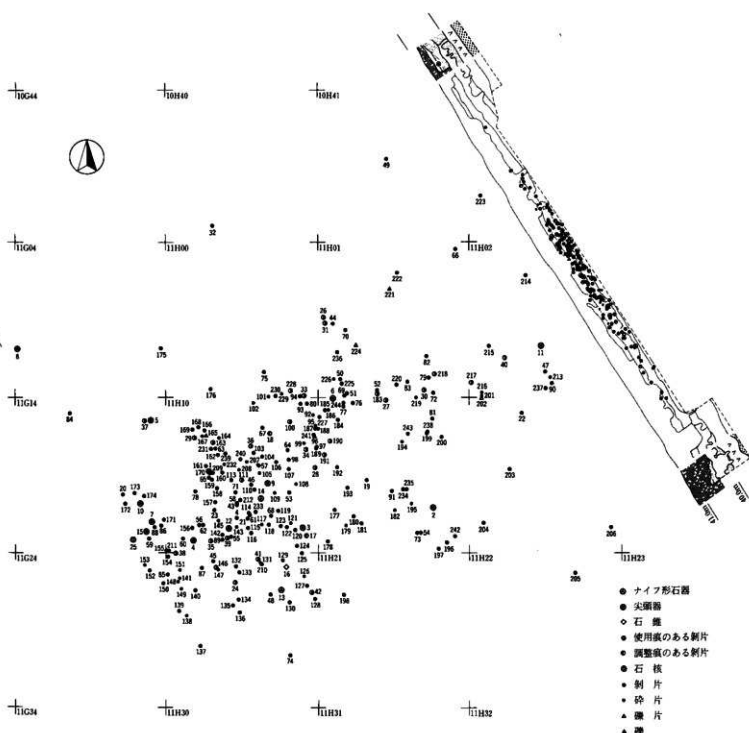
基本層序（第8図）

第8図に基本層序を示した。層名については当センターでの統一見解¹⁾にしたがって変更している。以下に、調査時の所見を記す。

- I層 耕作土。
- II b層 明赤褐色土層 新規テフラ。
- III層 明赤褐色ローム層 ソフトロームを一括している。
- IV～V層 赤褐色ローム層 褐色スコリアを多く含む。下半部は第1黒色帯に相当。
- VI層 明赤褐色ローム層 始良丹沢火山灰（AT）を含む。乾燥すると顕著にクラックが入る。
- VII～IX層 暗赤褐色ローム層 第2黒色帯に相当。赤色スコリアを多く含む。
- X層 淡赤褐色ローム層 粘性があり、赤色スコリアを少量含む。立川ローム最下層。
- XI層 淡赤褐色ローム層 粘性があるが、しまり不良。武蔵野ローム最上層。III層の下部は波状帯を呈しており、IV層～V層に相当する部分の大半がソフト化によって顕微鏡となっている。V層は第1黒色帯に当たるが、暗色化は顕著ではない。VI層はやや厚めに抽出され、下半部は第2黒色帯上部を包括している可能性がある。VII～IX層は第2黒色帯に相当するが、これ以上の細分はなされていない。

注

- 1 島立桂・新田浩三・波辺修一 1992「下総台地における立川ローム層の層序区分 一平成2・3年度職員研修会から」『研究連絡誌』第35号 栃千葉県文化財センター

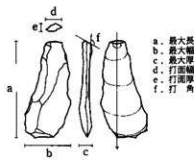


第9図 石器集中地点出土状況(1) (器種別)と主要石器

第1表 石器集中地点 器種と石材構成

	尖頭器	ナイフ形 石器	石 錐	使用板 の剥片	調整板 の剥片	剥 片	砕 片	石 核	レ キ	レキ片	合 計	組成比
黒曜石 A	4 8.88			8 4.53	1 3.42	85 52.07	37 2.68				135 71.58	55.33 23.74
黒曜石 B	3 7.98			3 3.23		8 5.77					14 16.98	5.74 5.63
黒曜石 C				1 1.12		8 5.03					9 6.15	3.69 2.04
黒曜石 D				2 1.93		8 10.65	1 0.11				11 12.69	4.51 4.21
黒曜石 E				1 0.15		3 2.42					4 2.57	1.64 0.85
黒曜石 F	3 12.83			4 2.25		9 10.32	1 0.1				17 25.50	6.97 8.46
黒曜石 G	1 2.5			3 2		3 9					4 11.50	1.64 3.81
黒曜石 H				2 2		2 1.48					2 1.48	0.82 0.49
黒曜石 I				2 2		2 12.43					2 12.43	0.82 4.12
黒曜石 J	1 4.93			1 1		1 1.68					2 6.61	0.82 2.19
黒曜石 K				2 0.92		4 1.75					6 2.67	2.46 0.89
黒曜石				2 2		2 0.5	1 0.12				3 0.62	1.23 0.21
珪質頁岩 A		2 1.69	1 0.83	2 0.66		2 0.27					7 3.45	2.87 1.14
珪質頁岩 A1				2 5.51		2 3					2 5.51	0.82 0.83
珪質頁岩 A2				1 0.29		1 0.64					3 0.93	1.23 0.31
珪質頁岩				3 3		3 0.61					3 0.61	1.23 0.20
安山岩 A	1 8.5			1 0.66		7 17.5		1 38.07			10 64.75	4.10 21.47
安山岩 B						1 12.8					1 12.8	0.41 4.24
安山岩										2 16.57	2 16.57	0.82 0.82
凝灰岩					1 1.86					1 1.96	2 3.82	0.82 1.27
メノウ						1 3.23					1 3.23	0.41 1.07
砂岩						1 0.92			1 16.85		2 17.77	0.82 5.89
片岩						1 1.14					1 1.14	0.41 0.38
その他									1 0.19		1 0.19	0.41 0.06
合 計	13 45.64	2 1.69	1 0.83	27 21.25	2 5.28	153 150.21	40 3.01	1 38.07	2 17.04	3 18.53	244 301.55	100 100.00
組 成 比	5.33 15.14	0.82 0.56	0.41 0.28	11.07 7.06	0.82 1.75	62.70 49.81	16.39 1.00	0.41 12.62	1.23 5.65	1.23 6.14	100.00 100.00	

※ 上段は点数, 下段は重量(g)



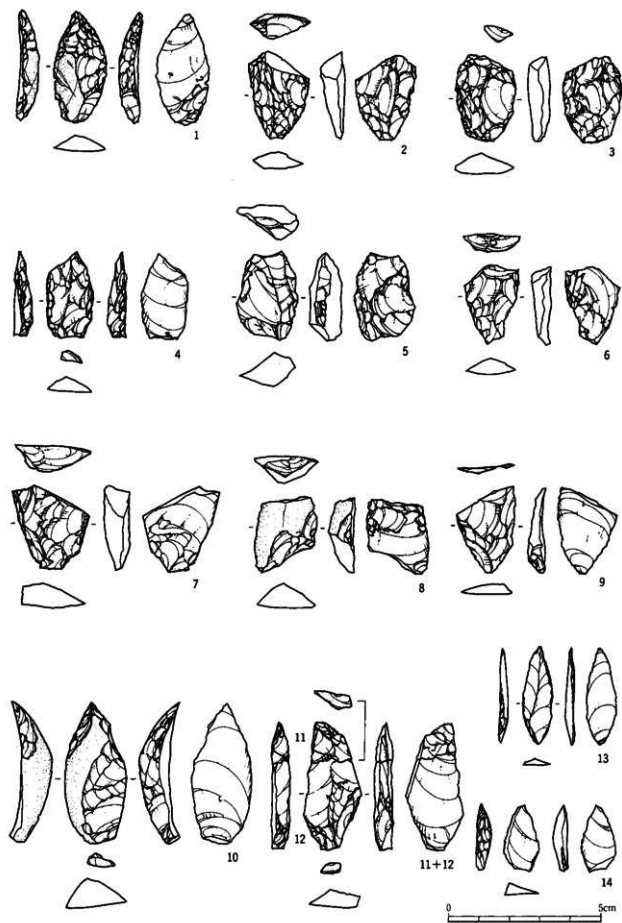
石器計測部位凡例

観察表について

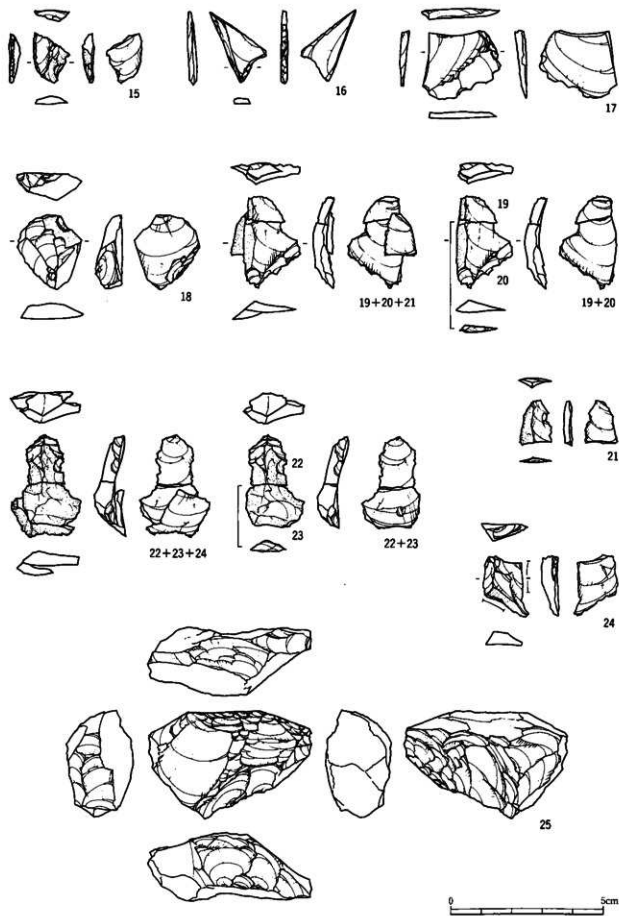
1. 採図No. 実測図を掲載した遺物の通し番号。平面分布図に付した番号と一致する。
2. 分布No. 平面分布に付した番号。実測図を掲載したものについては採図番号と一致する。実測図を掲載しなかったものについてはグリッド、遺物No順に続けて番号を付した。
3. 最大長・最大幅・最大厚・打面幅・打面厚・打角計測方法については下図に示した。
4. 頭部調整・打面調整 有無を「○」で示した。
5. 背面構成 主要剥離面の剥離方向を基準とし、背面を構成する剥離面の種類と数を記した。ただし、変形度の高いもの(楔形石器等)は記さなかった。砕片はわかる範囲で記した。C=自然面, S=断面面, H=頭部側, T=尾部側, R=背面を正面にして右方, L=左方, D=背面側, V=断面側を示す。
6. 折面部位 主要剥離面の剥離方向を基準とした折れ面の部位。H=頭部側, T=尾部側, R=右側, L=左側を示す。
7. 末端 F=フューエント, H=ヒンジフラクチャー, O=ウーラパッセを示す。
8. 母岩番号 石材名とその母岩番号を記した。母岩の大別をアルファベットで、細別を数字で記した。細別は基本的に複数の石器が帰属する母岩のみを分類したものである。従って、単独個体のものや細別困難なものについては石材名のみ、もしくは大別のみを行っている。
9. X・Y・Z 測量原点からの位置関係を示す公共座標を示す。X座標=南北方向, Y座標=東西方向, Z=標高。

第2表 石器集中地点 石器計測表(3)

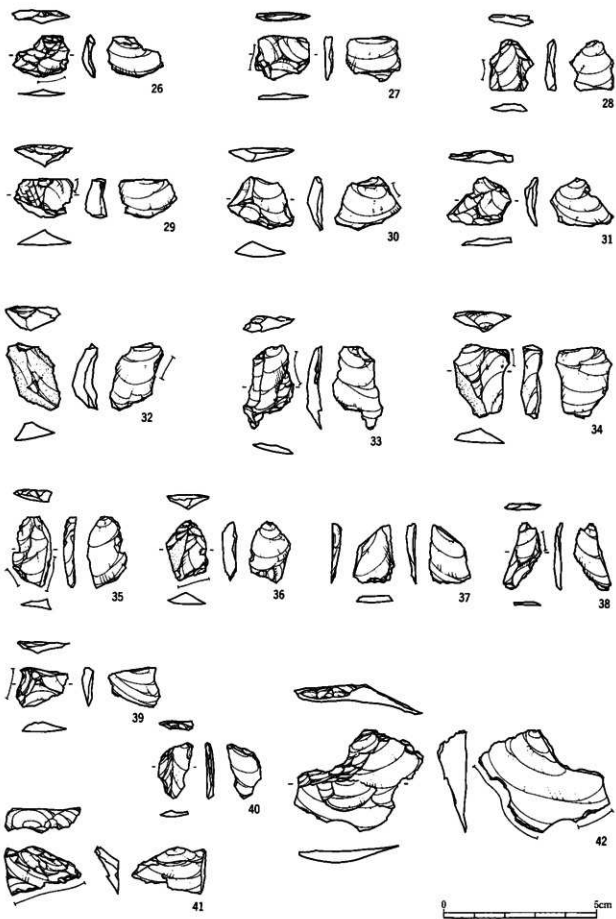
種別	分佈	年代	遺物	器種	最大長さ(mm)	最大幅(mm)	最大厚さ(mm)	重量(g)	打痕長さ(mm)	打痕幅(mm)	打痕形状(°)	内面打痕	外面打痕	打痕位置	石材	組合	X	Y	Z	備考
第102069	90	11.19.10	0003	柄打	25.0	27.4	7.3	4.17	18.5	4.4	1	137			F	安山石A	-32087.656	51881.485	40.559	トール本割
第102070	90	11.19.10	0223	柄打	32.5	28.6	4.2	3.23							F	ノコ	-32083.640	51899.183	40.316	
第102071	91	11.19.11	0172	柄打	42.0	48.0	6.5	12.80							H	安山石B	-32096.412	51885.977	40.516	
92	11.19.11	0002	柄打	9.0	7.7	1.6	0.08				P			F	安山石A	-32094.445	51883.560	40.548		
93	11.19.11	0003	柄打	10.5	10.2	1.5	0.14				P			T	燧石A	-32064.156	51883.540	40.547		
94	11.19.10	0004	柄打	10.5	11.0	1.7	0.18				P			H	燧石B	-32063.666	51883.538	40.546		
95	11.19.10	0005	柄打	8.1	5.7	0.7	0.07							H-L	燧石B	-32094.719	51883.533	40.417		
96	11.19.10	0006	トール本割	25.0	18.6	3.0	4.55							H-L	燧石B	-32095.001	51883.910	40.582		
97	11.19.10	0007	柄打	11.1	3.4	1.9	0.03							R	安山石C	-32095.873	51883.994	40.585		
98	11.19.10	0009	柄打	13.5	16.1	2.5	0.32				P			L-T	燧石F	-32095.901	51883.229	40.531		
99	11.19.10	0012	柄打	3.5	4.4	3.5	0.04							L-T	燧石F	-32095.170	51883.675	40.428		
100	11.19.10	0013	使用痕のある柄打	15.3	11.3	2.3	0.28							H-T	燧石A	-32094.653	51883.250	40.302		
101	11.19.10	0014	柄打	5.2	6.6	3.8	0.12							H-T	燧石	-32093.873	51882.094	40.568		
102	11.19.10	0015	柄打	9.5	6.6	1.0	0.08				P			F	燧石A	-32094.126	51882.265	40.478		
103	11.19.10	0019	柄打	10.2	8.1	1.6	0.09				P			F	燧石A	-32095.427	51882.311	40.401		
104	11.19.10	0020	柄打	5.6	10.3	2.8	0.17							H-R	燧石C	-32095.356	51883.534	40.388		
105	11.19.10	0022	柄打	6.3	6.6	1.9	0.04							H	燧石A	-32095.953	51881.461	40.292		
106	11.19.10	0023	柄打	12.5	12.0	2.0	0.25							H-T	燧石F	-32095.652	51882.954	40.413		
107	11.19.10	0024	柄打	7.4	9.6	1.8	0.09							H	燧石F	-32095.961	51883.226	40.315		
108	11.19.10	0025	柄打	7.0	5.6	2.2	0.10				P			H	燧石F	-32096.224	51883.417	40.275		
109	11.19.10	0029	柄打	7.1	6.1	1.0	0.03							T	燧石A	-32096.463	51882.851	40.384		
110	11.19.10	0032	柄打	8.3	14.5	2.1	0.25				P			T	燧石A	-32096.382	51882.333	40.495		
111	11.19.10	0034	使用痕のある柄打	8.5	8.6	2.0	0.15	1.3	1.3	C	110			T	燧石A	-32096.130	51881.986	40.435		
112	11.19.10	0035	柄打	7.8	9.5	1.9	0.14							T	燧石A	-32096.608	51881.904	40.374		
113	11.19.10	0036	柄打	12.6	17.0	3.7	0.66							H	H	燧石A	-32096.138	51881.725	40.418	
114	11.19.10	0038	柄打	12.2	16.9	7.8	1.19							H-T	燧石H	-32096.975	51881.180	40.507		
115	11.19.10	0040	柄打	10.1	5.2	1.3	0.05							H	F	燧石A	-32097.356	51881.156	40.445	
116	11.19.10	0041	柄打	6.0	2.8	3.9	0.33	6.6	3.2	1	126			T	燧石A	-32097.491	51881.239	40.658		
117	11.19.10	0042	柄打	6.5	5.6	2.2	0.08							T	燧石A	-32097.272	51881.516	40.396		
118	11.19.10	0043	柄打	12.0	7.1	1.9	0.15				P			H	燧石A	-32097.270	51881.700	40.603		
119	11.19.10	0045	柄打	13.6	7.8	2.5	0.19							H-T	燧石K	-32096.924	51882.854	40.295		
120	11.19.10	0048	柄打	12.2	10.1	2.7	0.27							L-R	燧石K	-32097.432	51883.401	40.838		
121	11.19.10	0049	柄打	6.8	7.1	1.3	0.04	4.5	1.3	1	133			T	燧石A	-32097.270	51883.270	40.612		
122	11.19.10	0050	柄打	12.6	10.6	3.4	0.42				P			H	燧石A	-32097.249	51883.176	40.383		
123	11.19.10	0051	柄打	10.5	11.2	1.2	0.12							H	燧石A	-32097.317	51883.614	40.237		
124	11.19.10	0052	柄打	8.0	10.4	1.3	0.12							H	F	燧石A	-32097.253	51883.438	トール本割	
125	11.19.10	0053	柄打	11.5	11.7	3.2	0.46							H-L	H-T	燧石B	-32098.000	51883.568	40.627	
126	11.19.10	0054	柄打	5.2	9.2	2.9	0.11	8.5	2.9	4(3)	125			T	燧石D	-32098.000	51883.626	40.605		
127	11.19.10	0055	柄打	8.7	12.3	2.7	0.34	9.5	2.9	1	126			H	燧石A	-32098.057	51883.712	40.417		
128	11.19.10	0056	柄打	17.6	14.8	3.5	0.63							H-L	燧石A	-32098.190	51883.317	40.534		
129	11.19.10	0059	柄打	10.5	8.4	3.7	0.32							H	燧石	-32098.185	51883.958	40.608		
130	11.19.10	0061	柄打	6.3	11.3	1.0	0.05							H	F	燧石A	-32099.283	51883.250	40.413	
131	11.19.10	0064	柄打	3.7	7.3	1.2	0.05							L	F	燧石A	-32099.368	51882.666	40.629	
132	11.19.10	0065	柄打	13.3	6.0	4.0	0.24							R	F	燧石B	-32099.564	51881.845	40.568	
133	11.19.10	0068	柄打	8.0	11.2	2.3	0.13							H-T	燧石A	-32099.310	51881.931	40.648		



第11图 石器集中地点 出土石器(1)



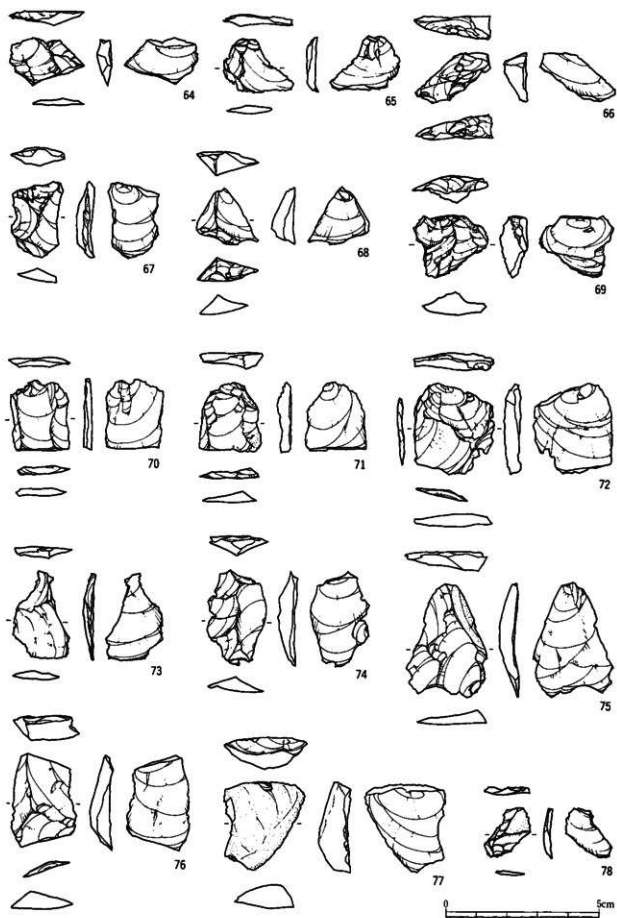
第12图 石器集中地点 出土石器(2)



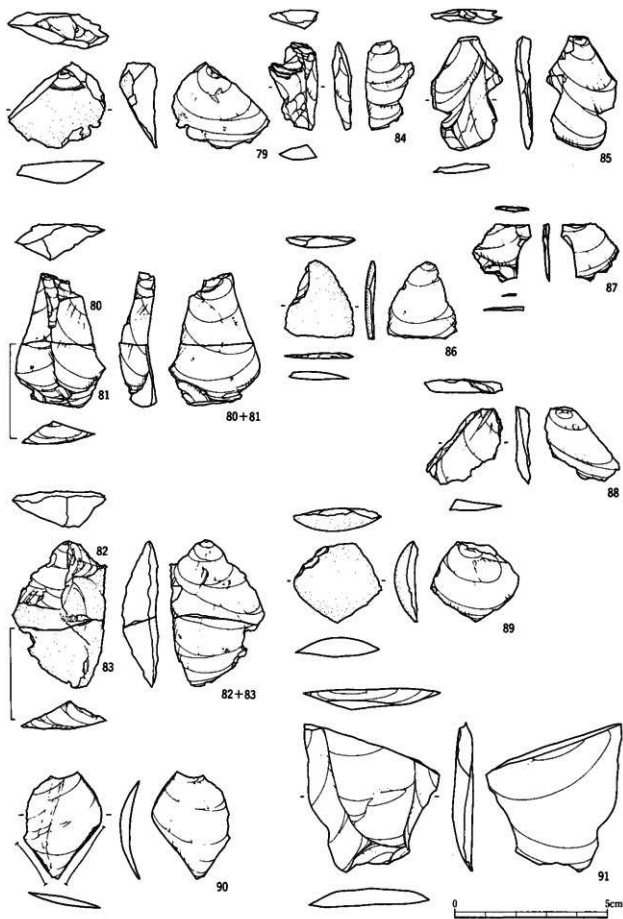
第13圖 石器集中地点 出土石器 (3)



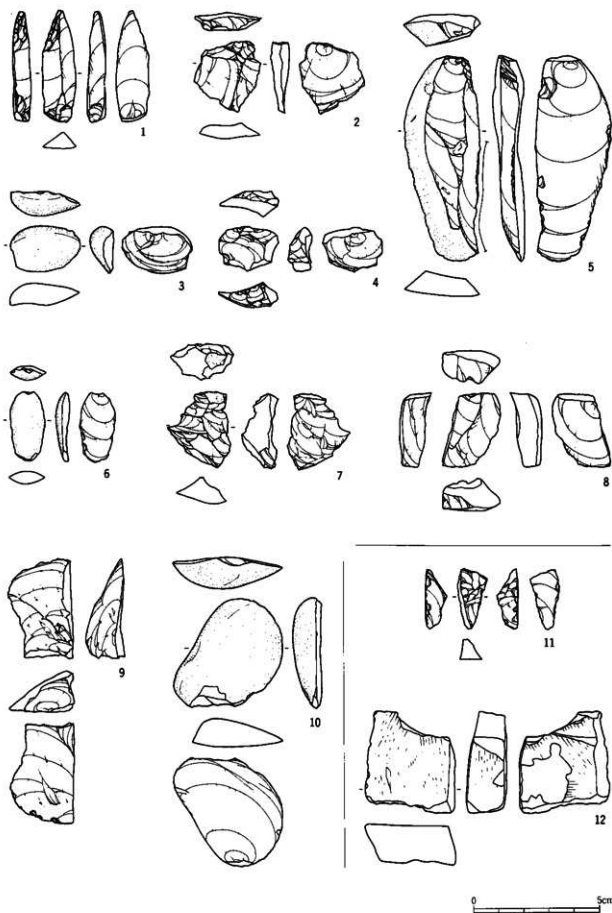
第14图 石器集中地点 出土石器(4)



第15图 石器集中地点 出土石器 (5)



第16图 石器集中地点 出土石器(6)



第17图 石器集中地点外 出土石器

第2節 古墳時代

本遺跡の古墳は、帆立貝式の前方後円墳1基、円墳2基、方墳1基の計4基である。このうち円墳1基と方墳1基は重なっており、これは円墳を作った後に埋め戻しをして方墳を作ったものとみられる。埋葬施設は2基の古墳において検出されたが、2基ともトレンチャーによる攪乱が激しく依存状態は悪い。また、本遺跡ではいずれの古墳においても埴輪は検出されなかった。

1号墳（第18図・第19図、図版4・図版5）

北調査区、5Dグリッドに位置する帆立貝式の前方後円墳である。後円部の南東側に僅かな張り出し部として前方部が見られ、周溝の一部と埋葬施設1基を検出した。

墳丘と周溝

古墳の西側1/3程度の発掘調査であるため正確な規模は不明だが、主軸は周溝の内側で19m以上、周溝の外径で24m以上の規模になるものとみられる。1号墳は、現在畑として耕作されている現表土面より約30cm掘り下げて確認面を検出しており、墳丘の高さは計測できない。

周溝は北側で深さ30cm、幅1.7mと残りがよく、前方部のコーナーを過ぎたあたりで幅3.5mと広くなり急激に消滅する。前方部正面はハードルーム層まですでに削平されており、周溝は有無は不明である。周溝内に灰白色粘土を含む層が検出された。埋葬施設の北西5m程に位置し1.5m×0.8mの楕円形で、厚さは10cm程度である。これは埋葬施設に用いられた裏込めの粘土と石棺に用いられた石が抜き取られ、粘土のみが周溝内に廃棄された結果であると考えられる。

遺物は全て周溝から出土し、土師器片と須恵器片で数十点あるが、いずれも細片であるため時期や型式を判断するには至らなかった。

埋葬施設

埋葬施設は、墳丘のやや南西寄りに1基検出された。掘り方での規模は約2.5m×3.0mの長方形である。埋葬施設の規模は約0.6m×2.1mの長方形で、主軸方位はN-57°-Wである。掘り方の確認面からの深さは約50cmであった。トレンチャーの影響が大きく、深さ40cmまで攪乱されており、掘り方底部には灰白色粘土が見られるものの石棺は検出できなかった。

掘り方の底部は約1.5m×2.5mの規模で10cmほど掘り窪められており、中心部に灰白色粘土を配しその周りにロームブロックが硬くしめられた状態で検出された。このことから灰白色粘土を敷き詰めた上に石棺をおいたものとみられ、これが埋葬施設全体の規模に該当するものと考えられる。埋葬施設の構築工程は、まず粘土を底に敷き、その上に石棺を置いたのち周りを粘土で裏込めし、ロームブロックで隙間を充填したものと考えられる。

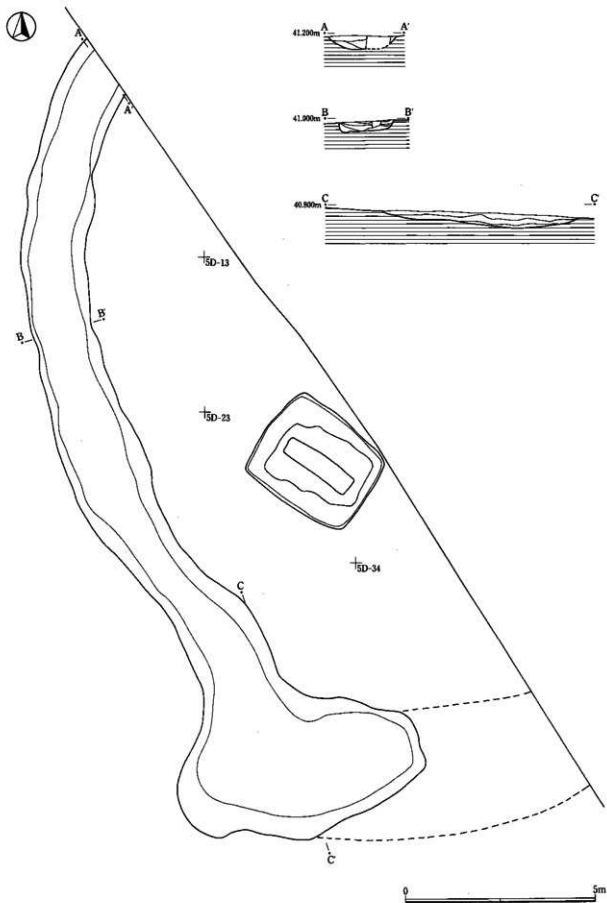
2号墳（第20図、図版5・図版6）

南調査区12Hグリッドから13Iグリッドにかけて位置する円墳である。周溝と、若干ではあるが墳丘の高まりを検出することができた。

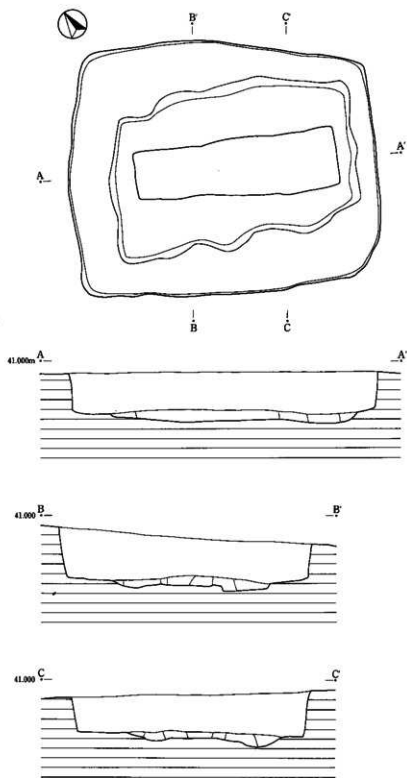
埋葬施設は検出されなかったが、これは調査区外となった墳丘部分に位置するか、耕作により破壊されたものとみられる。

また、本遺構の東側には7号溝が南北に走り、西側には8号土坑群が位置するが、周溝の外側に接していたため本遺構への影響はほとんどなかったと考えられる。

古墳の規模は、墳丘の中心から周溝の内径で17m、周溝の外径で25mである。墳丘の高まりは、畑とし



第18图 1号填实剖图



第19图 1号墳埋葬施設実測図

て使用する際平らに整地されているため現地表面では確認することができなかったが、現地表面を除去した墳丘の確認面では中央部分が30cmほどの高まりとなっていた。

周溝は、確認面での深さ約80cm、幅3m～5mであり、北側の幅が広がっている。

2号墳出土遺物（第20図1～9、図版24）

周溝内から多数の土師器片が検出された。出土位置を記録して取り上げた土師器片は400点以上にもなるが、現代の耕作により細かく砕かれており復元可能なものは少ない。

第13図の1は口縁部径10.4cmの手捏ねによる土師器の坏である。器形は歪で、外面はヘラ状工具による粗い削り放ちで、ナデ等の器面調整はない。2は口縁部径17.0cmの土師器坏である。立ち上がりの低い口縁部は体部との境の稜線から僅かに外反する。外面は粗いヘラ削りの後のナデ調整である。3は口縁部径14.0cmの須恵器坏身の模倣坏である。体部との境の稜線から一段内弯した後真直ぐに立ち上がる外面は横位のヘラ削りの後のナデ調整が、口縁部にはヨコナデ調整がみられる。4は口縁部径11.2cmの土師器坏で、体部と口縁部の稜線を境に口縁部は直線的に外反する。5は口縁部径17.0cmで口縁部は体部との境の稜線から僅かに外反する。外面には僅かに横位のヘラ削りの痕跡が見られる。6は口縁部径12.0cmの椀状の土師器である。口縁部は体部からの曲面を引き継ぎそのまま立ち上がる。口縁部と体部の境には稜線は無いが体部にはナメ方向のヘラ削りが見られる。7は口縁部径12.6cmの土師器坏である。他の土師器坏に比べて器壁は厚く、口縁部は底部からの曲面のまま丸味の強い口唇部に至る。口縁部と体部の境に稜線は見られないが、体部外面には細かいつぎはぎ状のヘラ削りが見られる。8は口縁部径11.4cmの椀状の土師器である。体部は内側に大きく彎曲し、口縁部は体部との境から屈曲し、直上する体部外面には横位のヘラ削り痕、口縁部にヨコナデ調整がみられる。

9は口縁部径22.0cmの土師器の甕である。口縁部は胴部との境で真直ぐ立ち上がりまもなく大きく外反する。口唇部では外側に段を有する。体部外面はタテ方向のヘラ削りが見られ口縁部はヨコナデ調整が見られる。

2号墳出土の土師器坏はいずれも器高が低く、口縁部の退化した形状のものが目立つ。9の甕はやや時代が新しいものと考えられる。

3号墳（第21図・第22図、図版6～図版8）

南調査区14Jグリッドに位置する方墳である。周溝と埋葬施設1基を検出した。

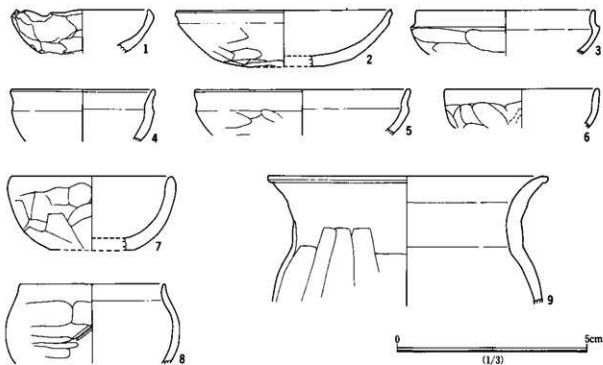
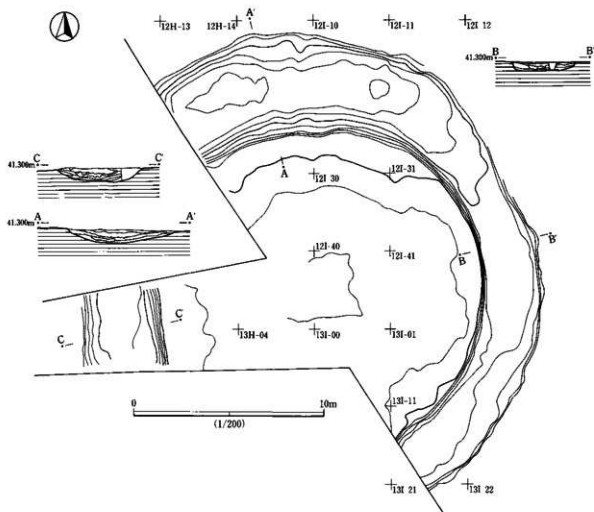
墳丘と周溝

古墳の西側半分ほどの調査であったが、7号溝が周溝と墳丘の端を攪乱するため、正確な規模はわからないが周溝の内側で12m～15m、周溝の外側で18m～21m程度の規模になるものとみられる。古墳の主軸は、南北方向からやや西に傾く。墳丘の高さは畑として耕作されていたため僅かな高まりを残すのみであった。

周溝は、北側は約2m、南側は3m～4mと広がる。深さは確認面からで50cmである。

埋葬施設

埋葬施設は、墳丘の西寄りに切石積箱式石棺墓1基が検出された。石室の両側壁はブロック状に切り揃えた軟質砂岩を二段の横口のレンガが積みしたものである。耕作用トレンチャーによる攪乱のため遺存状態は悪い。掘り方で規模は約2.6m×4.2mの隅丸長方形で、石棺の規模は約1.2m×2.6m、内側で約0.4m×1.9mの長方形である。蓋石は大部分が石室内に崩落していたが、西側に原位置をとどめている蓋石が



第20图 2号墳実測図、出土遺物実測図

あり、これからみると内部の高さは55cm程度となる。石棺の長軸方位は、 $W-4^{\circ}-S$ であった。石棺東側を横切る形の長方形の擾乱は、側面から見ると掘り込みが直角であることや、その形状から最近になって機械によって貯蔵施設などとして掘られたものとみられる。また、残っている石棺からは盗掘された跡は確認できなかった。石棺は掘り方に薄く敷き詰めた白色粘土の上に板状の底石を3枚並べ、奥壁となる高さのある石材を置いている。底石と奥壁を囲むように3個ないし4個の切石ブロックを両側に置き一段目としている。二段目は、一段目の上に横口積みされるが、隣石との接合か所を一段目の接合か所とずらした位置に配置している。それぞれの切石のすき間は粘土で充填している。石棺のまわりには下半分を粘土により、上半分をロームブロックにより充填している。

3号墳出土遺物（第21図1～34、図版24・図版25）

埋葬施設内部からは鉄鍔がまとめて検出された。また裏込め東側の下部より、土師器の坏1個体が検出された。2は口径14.4cm、器高5.6cmの土師器坏である。口縁部は体部との境から真直ぐ立ち上がる。体部外面には横位の小刻みなへう削りが見られる。

周溝内からは、遺存状態のよい須恵器の埴瓶1個体が検出された。壺と坏の土師器片も十数点検出されたが小片で復元はできなかった。1は須恵器の埴瓶であるが、3号墳の周溝出土のものと7号溝出土の数の須恵器片との接合資料である。片面はドーム状の、他の面は平坦な形状の扁球体で、口縁部が欠損しているため詳細は不明であるが両側の肩に鋳形の把手を貼付する。両側面ともに外面は回転カキ目調整が見られる。

埋葬施設である石棺内からは鉄鍔が石棺中央の南側壁に接して出土している。鉄鍔はいずれも尖根系の鉄鍔で、小破片に破損しており個体数は特定できない。3は鍔身部・鍔被部・茎部からなる鍔被式鉄鍔で鍔身長2.4cm、鍔身幅1.2cm、鍔被長9.6cm、鍔被幅0.6cm、鍔被下端幅0.7cmで類鑿箭式系の範疇に入る。茎には木質部が僅かに残存する。4は鍔被部のみ5個体分の鉄鍔片が錆のため付着したものである。いずれも鍔被式鉄鍔の鍔被部である。5は鍔被式鉄鍔の鍔被部で鍔身・茎を欠く。鍔被幅は0.6cmである。6は鍔被式鉄鍔の鍔被部と茎である。鍔被部と茎部の境の間には段があり、茎には木質部が残存する。鍔被幅は0.5cm、鍔被下端幅0.7cmである。7は鍔被式鉄鍔の鍔被部であり、鍔被幅は0.6cmである。8・11は木質部の残る茎部である。9・10は鍔被式鉄鍔の鍔被部である。9は鍔被幅が0.5cmで、10は鍔被幅が0.4cmとなっている。

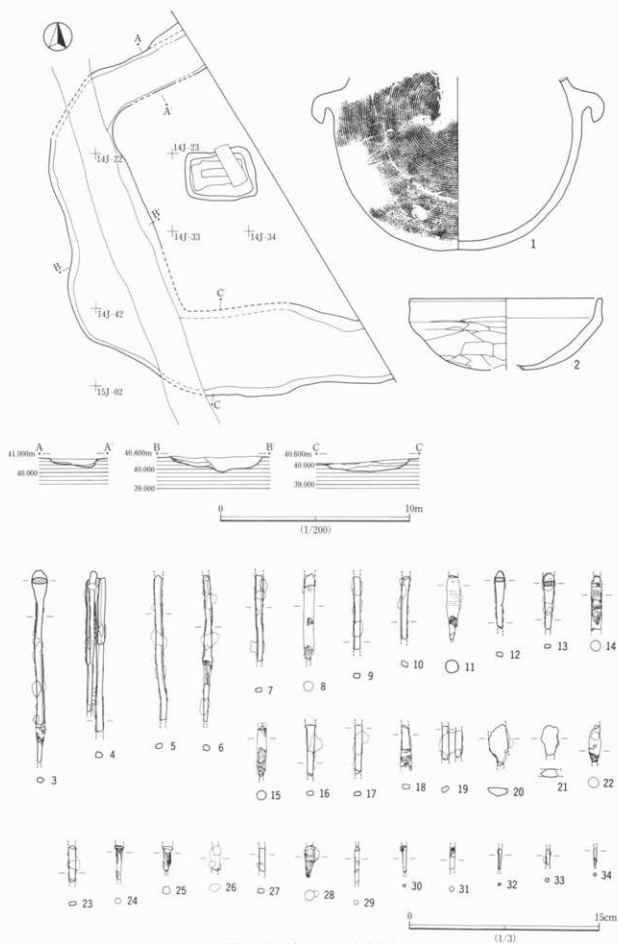
12・13は鍔被式鉄鍔の類鑿箭式系鉄鍔の鍔身で、12は鍔身長3.0cm、鍔身幅0.8cmであり、13は鍔身幅0.9cmである。20・21は鍔被式鉄鍔の鍔身と鍔被部であるが、欠損部分が大きく類別を判断できない。

14・15はいずれも木質部が残存する鉄鍔の茎部であり、14の茎部は鍔被部との境の間に段が見られる。鍔被下端幅は0.9cmである。

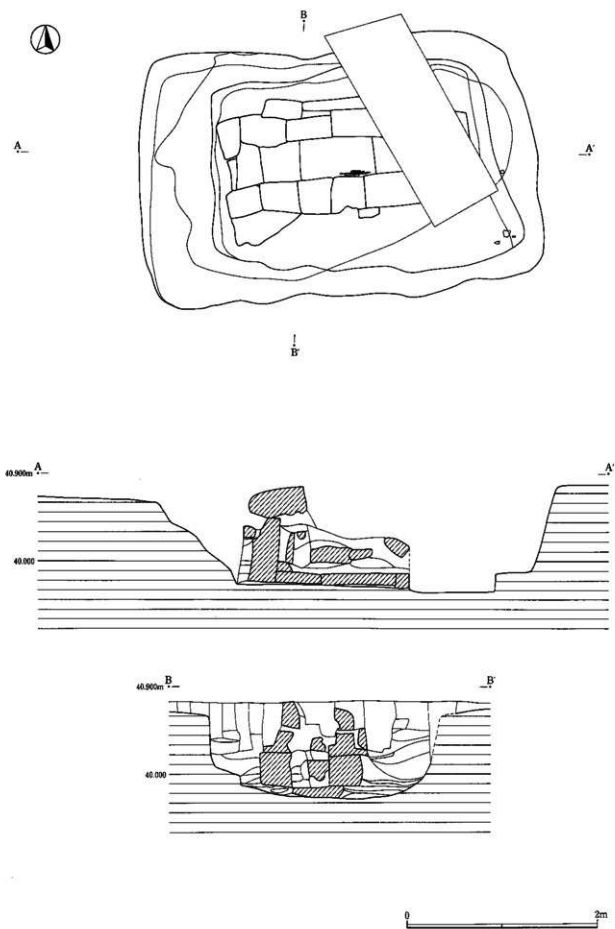
16は鉄鍔の茎部で欠損する鍔被部との境の間に段を有する。鍔被下端幅は0.8cmである。17は鍔被式鉄鍔の鍔被部である。18は鍔被式鉄鍔の鍔被部と茎部である。19は鍔被式鉄鍔2個体分の鍔被部が錆によって付着したものである。22は鉄鍔の茎部で木質部が残存する。23・26・27は鍔被式鉄鍔の鍔被部である。

24・25・28は鉄鍔の鍔被部と茎部である。24は木質部は見られないが、25・28は僅かながら木質部が残存する。

29～34は鉄鍔の茎端部付近の小破片である。



第21图 3号填实测图、出土遗物实测图



第22图 3号墳埋葬施設実測図

4号墳(第23図, 図版8)

墳丘と周溝

3号墳が造られる前に、14Jグリッドに位置した円墳であり、ほとんど重なって位置する遺構である。3号墳の墳丘下より4号墳の周溝が検出され、4号墳の周溝を埋め戻して3号墳の周溝を造ったことがわかる。今回の調査では西側の一部分を検出したにすぎず、また周溝が3号方墳の周溝と重なるため正確な規模はわからないが、現存する範囲から推定される規模は周溝の内径約13m、周溝の外径約18mである。周溝の深さは確認面から約70cmである。

また、墳丘の高さは3号方墳同様確認できなかった。

4号墳出土遺物(第23図1, 図版24)

遺物は、坏の土師器片を十数点検出したがいずれも小片であった。1は口径11.6cmの土師器甕の口縁部である。口縁部は胴部との境から大きく外反する。口縁部外面はヨコナテ調整、胴部との境には僅かにタテ方向のヘラ削りの痕跡が見られる。

第3節 その他の時代の遺構

1 縄文時代

1号竪穴状遺構からは主に縄文土器が出土しており縄文時代の遺構であると考えられるが、床面直上の遺物が無いため時期は特定できない。

1号竪穴状遺構(第24図, 図版4)

本遺構は、調査区南調査区北側の11H-41グリッドに位置する。調査区の関係で、遺構は北東部の一部のみの調査となったため全体の形状は不明だが、調査した範囲での規模は9.0m×2.2mで、歪んだ半円形である。遺構の掘り込みは遺構検出面から約40cmであり、底面はほぼ平坦であるが硬化面は見られなかった。遺物から縄文時代中期の遺構ともみられるが、壁の立ち上がりがゆるやかで床面も明瞭でない。

1号竪穴状遺構出土遺物(第32図, 図版21)

遺物はいずれも加曾利E式土器である。1は口縁部につけられた有孔の小型把手である。2は胴部で微隆起線文で文様が区切られ、右側には縄文が施してある。3は全面に縄文を施してある。

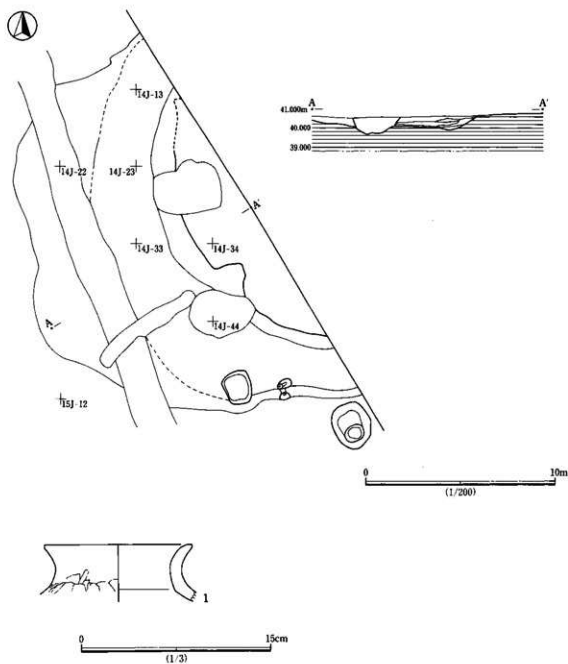
2 奈良平安時代から中世

2号竪穴状遺構(第24図, 図版10)

南調査区の南東端、18L-20グリッドに位置する竪穴状遺構である。遺構全体での規模は、8.2m×3.8mで北側の広い台形状で南側の竪穴状遺構は北側の大きな竪穴状遺構によって切り取られている。北に位置する大きな竪穴状遺構が6.0m×3.8m、南に位置する小さなものが2.2m×2.2mの規模である。底面はほぼ平坦であり、掘り込みの深さは確認面から約30cmである。壁の立ち上がりは、遺構全体でほぼ同じように弧を描いて立ち上がる。底面にはビットが十数基散らばり、規模は直径20cm～50cmで、深さは10cm～90cmである。覆土中に検出した土師器片は小片のため図示できないが、床面に近いところで検出されており、本遺構に伴うものと考えられる。また、遺構確認面で埴輪片を大量に検出したが、これは隣接する山田宝馬にわたり塚古墳に伴う遺物と考えられる。

3号竪穴状遺構(第25図, 図版11)

南調査区の北側、11H-41グリッドに位置する土坑である。遺構の規模は1.4m×1.0mの方形で、1号



第23図 4号墳実測図、出土遺物実測図

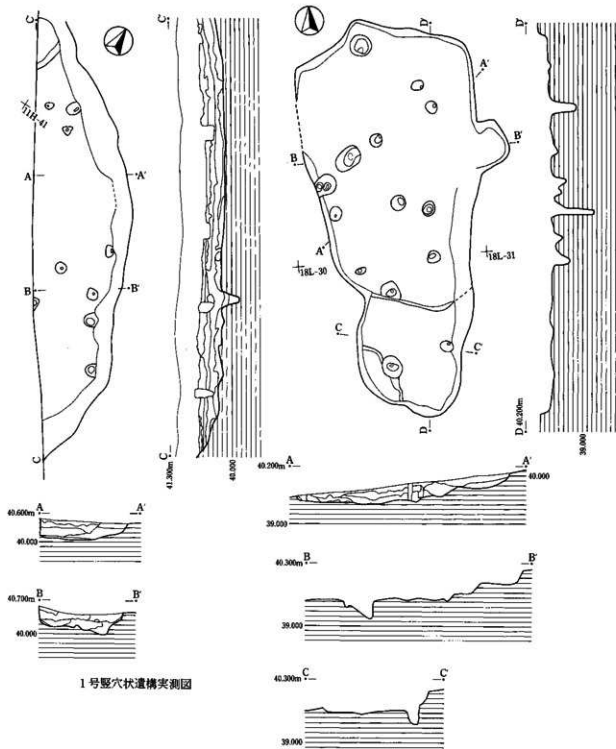
竪穴状遺構の東に接する。底部にはビットを有し、平坦な底部から丸く弧を描くように壁が立ち上がり、深さは約20cmである。遺構の中央にビットがあり、ビットの平面形80cm×50cmの規模で深さは約30cmである。きわめて規模が小さいことから柵杭の基礎とも考えられる。

4号竪穴状遺構（第25図、図版11）

南調査区の北側、11H-21グリッドに位置する竪穴状遺構である。遺構の規模は2.7m×1.5mで東西方向に長い隅丸方形を呈する。底面はほぼ平らで壁は丸く円を描くように立ち上がり、遺構の深さは約30cmである。南側壁の中央部にやや掘りくぼめられたビット状が見られ、深さは10cm程度である。

5号竪穴状遺構（第25図、図版11）

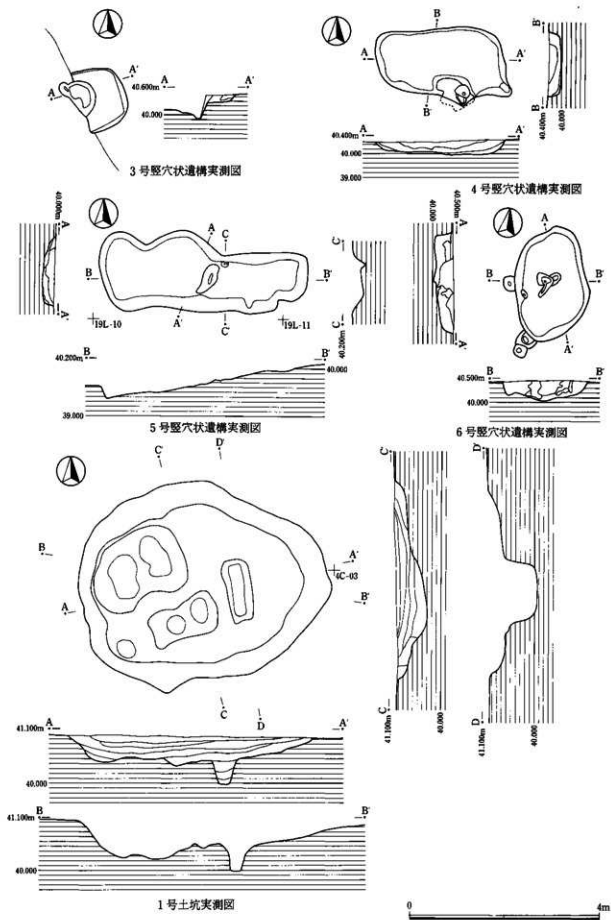
調査区南調査区の南東端、19L-00グリッドに位置する竪穴状遺構である。遺構の規模は4.4m×1.7m



1号 坑穴状遗构实测图

2号 坑穴状遗构实测图

第24图 1号·2号坑穴状遗构实测图



第25图 3号·4号·5号·6号竖穴状遗构实测图、1号土坑实测图

で、形は東西に長く伸びるが不整形である。底面はほぼ平らで、深さは西になるに従って段々と深くなり、西端での深さは約30cmである。底面の中央にピットが2基あり、深さは両方とも約10cmである。

6号竪穴状遺構（第25図、図版12）

南調査区の北側、11H-43グリッドに位置する竪穴状遺構である。遺構の規模は2.4m×1.6mで、隅丸方形の平面形である。底面はほぼ平らで壁は弧を描くように立ち上がり、深さは約40cmである。底面及び本遺構に接して小ピットが数基位置するが、直径は20cm～50cmで、深さは10cm程度である。

以上の竪穴状遺構は、いずれも伴出する遺物に乏しいが、3号竪穴状遺構～6号竪穴状遺構は方形の平面形で底部にピットを有し、底部は比較的平坦で、壁の立ち上がりが弧を描く共通の要素が見られることから奈良平安時代以降の遺構であると考えられる。

1号土坑（第25図、図版9）

北調査区、4C-02グリッドに位置する土坑である。規模は5.3m×4.0mで、楕円形を呈する。遺構の深さは約25cmで、壁はゆるやかに傾斜する。底面の規模は4.5m×3.2mである。底面には3か所の掘り込みがあり、西側に位置する二つのものは約10cm、東側の長方形のものは約50cmさらに掘り込まれる。

遺物は土師器の坏及び甕の小片13点を検出したが、図示できるものはなかった。石器では、火打ち石1点を検出した。

2号土坑（第26図、図版9）

調査区北調査区、4D-20グリッドに位置する土坑である。規模は5.4m×2.9mで、円形の土坑が2つ南北につながった形である。平坦な底面は持たず、緩やかに傾斜していく。深さは南側で40cm、北側で55cmである。

遺物は土師器の坏及び甕の小片11点を検出したが、図示できるものはなかった。

3号土坑（第26図、図版9）

北調査区、4C-14グリッドに位置する土坑である。規模は3.1m×1.7mで、平面形は楕円形である。底面は東から西に向かって深く傾斜する。深さは西側の一番深いところで約30cmである。

遺物は土師器の小片1点を検出したが図示できるものはなかった。

4号土坑（第26図、図版10）

北調査区、4C-00グリッドに位置する土坑である。南西部が一部調査区外であったが、検出した範囲での規模は4.4m×3.5mの隅丸方形である。遺構の深さは約1mで、壁はゆるやかに傾斜する。底面の規模は2.9m×2.7mである。底面には3か所の小さな掘り込みがあり、深さは10cm～20cmであった。

遺物は土師器の坏及び須恵器の坏蓋、計6点を検出したが図示できるものはなかった。

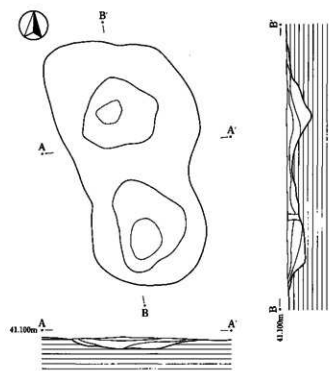
5号土坑（第26図、図版8）

南調査区の中央、14J-34グリッド付近に位置する土坑である。4号円墳の南西側周溝内に位置する。遺構の規模は3.6m×2.3mで、東西方向にのびる楕円形を呈する。深さは開口部から約1.0mを計る。調査時の所見より中世以降の土坑と見られる。

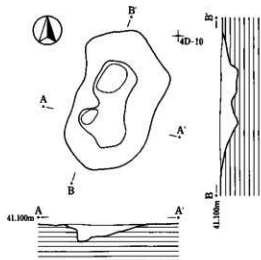
本遺構から遺物は検出されなかった。

6号土坑（第26図、図版12）

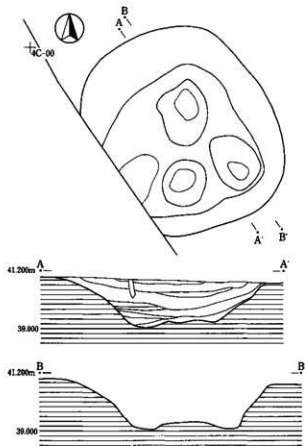
南調査区の北側、11H-41グリッドに位置する土坑である。1号竪穴状遺構の東側に接し、また本遺構の南に3号竪穴状遺構が位置する。遺構の規模は1.6m×1.5mで、ほぼ円形の平面形である。深さは約1.8



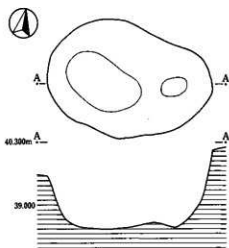
2号土坑实测图



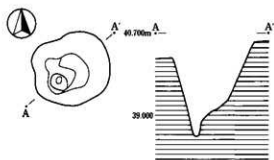
3号土坑实测图



4号土坑实测图



5号土坑实测图



6号土坑实测图



第26图 2号·3号·4号·5号·6号土坑实测图

mで、80cm×80cm規模の底面西側に小ビットがあり一段深くなっている形である。

本遺構から遺物は検出されなかった。

7号土坑（第27図，図版12）

調査区南調査区の南東端，18L-31グリッドに位置する土坑である。3号溝状遺構中に本遺構の西半分が入る。遺構の形はほぼ円形の漏斗状で，規模は2.1m×1.8m，深さは90cmである。

8号土坑（第27図，図版13）

調査区南調査区の中央よりやや北西，13H-00グリッド付近に位置する土坑である。本遺構は，2号墳の西側にまとまって位置する8基の土坑である。形は楕円形及び細長い不整形で，規模は小さなもので0.7m×0.5m，大きなもので1.6m×0.8mである。深さは30cm～40cmほどである。

本遺構から遺物は検出されなかった。

1号溝状遺構（第27図，図版13）

南調査区の中央よりやや北西，13H-00グリッドに位置する遺構であり，8号土坑の南西に位置する。攪乱と調査区の境界にかかったため，検出された長さは1.5mである。幅70cm，深さ40cmである。

本遺構から遺物は検出されなかった。

2号溝状遺構（第27図，図版8）

南調査区の中央，14J-43グリッド付近を流れる溝である。4号円墳の周溝上に位置し，規模は長さ約6m，幅約1m，深さ10cm～30cmである。

本遺構から遺物は検出されなかった。

3号溝状遺構（第27図，図版13）

南調査区の南東端，18K-24グリッド～19K-14グリッドにかけて南北方向に流れる形で位置する遺構であり，溝の西側一部分は調査区外となる。調査された範囲での溝の長さは約18mで，幅1.7mである。深さは0.5cm～1.0cmで，断面の形状はほぼ丸をえがく。また，溝の底に約1.5m間隔でビットが10基一列に並び，溝の底面からの深さは30cm～50cmである。

4号溝状遺構（第28図，図版13）

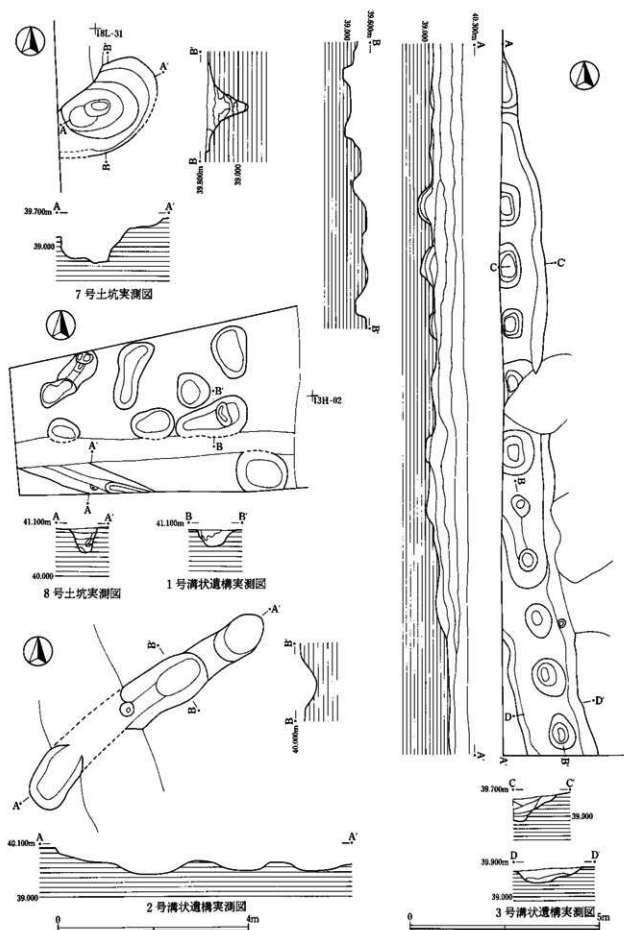
南調査区の南東端，18L-40グリッド付近に位置する遺構である。東から西方向に走る溝で，約3.5mの長さにわたって検出された。溝の幅は東端で50cm，深さ30cm，西端では幅2.2m，深さ20cmの規模となる。溝の底に楕円形のビットが3基ほぼ1列に並び，規模は0.7m×0.6m～1.4m×0.5mであり，深さは20cm～40cmである。

5号溝状遺構（第28図，図版14）

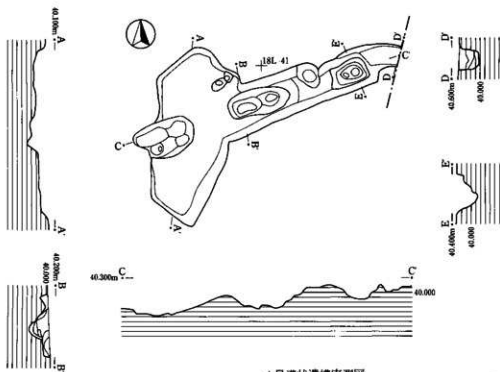
南調査区の南東端，19L-00グリッド付近に位置する遺構である。4号溝の南を平行に走る溝であり，形状も似ている。溝の幅は西端で幅1m，深さ40cmをはかり，東端では幅2m，深さ20cmとなる。溝の底に楕円形のビットが5基ほぼ1列にならび，規模は80cm×50cm～50cm×40cmであり，深さは20cm～30cmである。また溝の下部，南西端より1.2m×0.9mの楕円形の形の焼土層を検出した。

6号溝状遺構（第29図，図版14）

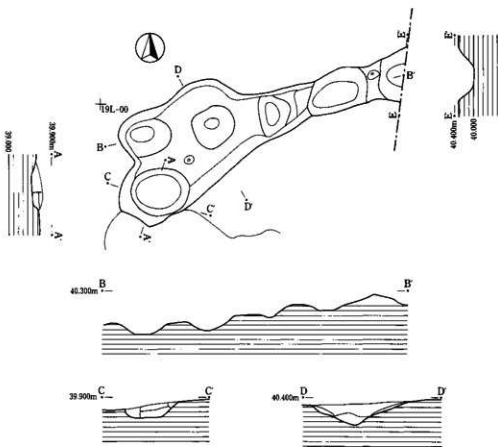
南調査区の中央を東から西の方向に向かって走り，2号円墳の周溝と交差した地点で終わる溝である。13I-03グリッドから13J-13グリッドに至る。溝の検出された長さは約23mにおよぶ。溝の幅は0.5mから1.5mで，7号溝と交わる中間地点で約3mと幅が広がる。深さは一番深い遺構の西側で，55cmで



第27图 7号·8号土坑实测图、1号·2号·3号沟状遗构实测图



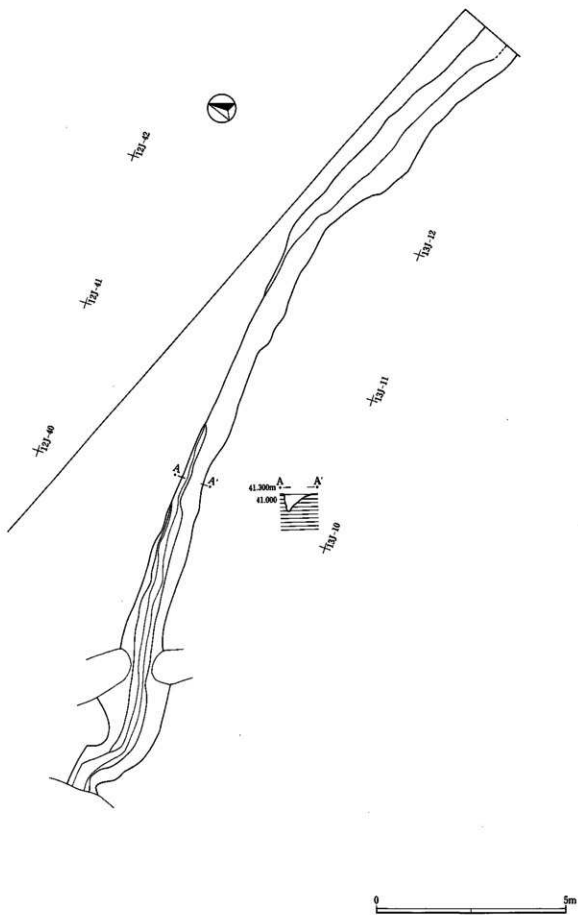
4号溝状遺構実測図



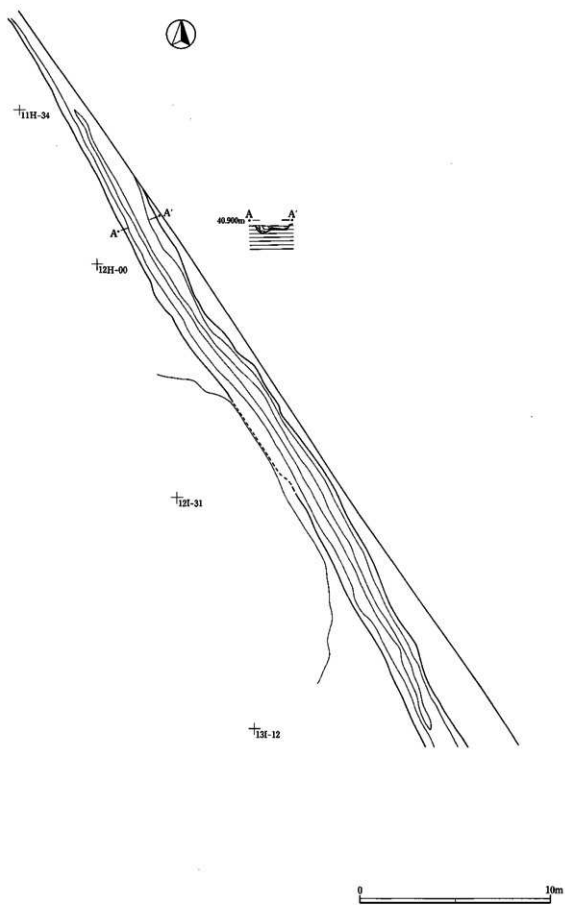
5号溝状遺構実測図



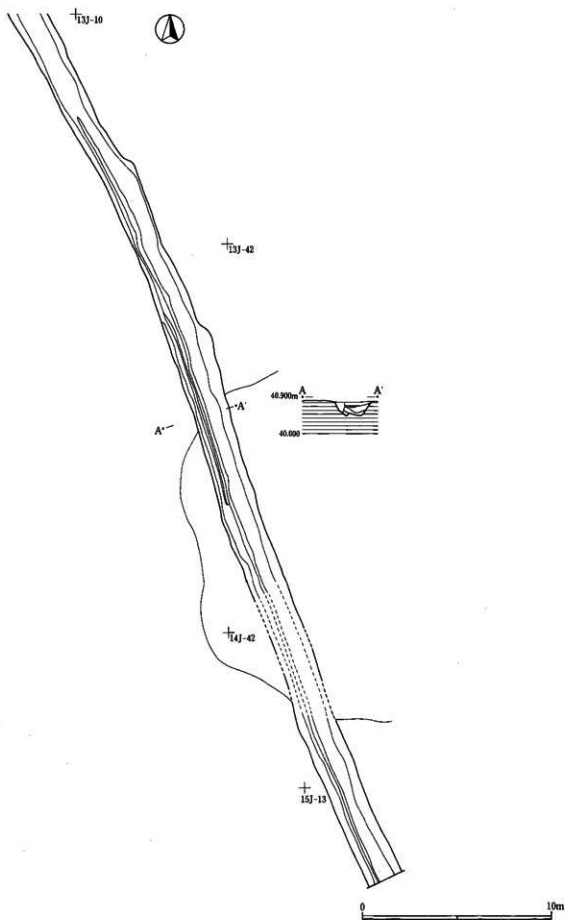
第28図 4号・5号溝状遺構実測図



第29図 6号湾状遺構実測図



第30图 7号沟状遺構実測図(1)



第31图 7号溝状遺構実測図(2)

ある。

本遺構から遺物は検出されなかった。

7号溝状遺構（第30図・第31図、図版14）

調査区南調査区の中央をほぼ北西から南東に向けて流れる溝であり、11H-34グリッドから15J-13グリッドにいたる遺構である。溝の検出された長さは約90mに及び、北側では2号円墳周溝の東をかすめ、南側では3号方墳の周溝内を通過する。溝の幅はほぼ2mで、深さは50cm～80cmである。

遺物は、古墳から流れ込んだものとみられる壘及び坏の土師器片を60点あまり検出したが、いずれも小片で図示できるものはなかった。

第4節 遺構外出土遺物

1 縄文時代（第32図～第34図・図版21～図版23）

縄文時代の出土遺物の分布の密度は南調査区に多く、特に14グリッドに集中していた。このことから2号円墳や6・7号溝状遺構によって壊された遺構が存在した可能性は考えられる。また、遺物は縄文時代包含層及びⅢ層上部から出土したもので、時期的には早期から晩期のものまでであるが、なかでも中期から後期のものの比率が高かった。

グリッドから出土した土器は308点である。時期別にⅠ～Ⅵ群に大別する。しかしながら、遺存度の高い遺物は少なく、復元できるものはなかった。なかでも埴山Ⅱ式土器の深鉢は1個体分の破片が比較的多く出土したが、復元するには至らなかった。

第Ⅰ群土器 縄文時代早期の土器（1）

本群の土器は1点で、田戸下層式土器に比定される。

1は無文の口縁部である。口径は12.8cmである。

第Ⅱ群土器 縄文時代前期前葉の土器（2）

本群の土器は1点で、黒浜式土器に比定される。

2は織帷を多量に含む脆い土器片で、無節縄文と沈線が施されている。

第Ⅲ群土器 縄文時代前期後葉の土器（3～23）

本群の土器は、浮島式土器、諸磯式土器、興津式土器に分類される。

3・4は同一個体であり、浮島Ⅰb式土器である。3は口縁部で地文は本来の捺糸文に変わって縄文となっている。4は変形爪形文を施しその上下には縄文地に沈線が巡る。5～8は、縄文地に沈線が施されており同一個体であり、諸磯a式土器と考えられる。9も沈線を施すが地文は捺糸文とみられ、浮島Ⅰa式土器である。

10～23は浮島・興津式土器及びこれと同時期に比定される条線文をもつ土器である。10～16は同一個体で、沈線及び沈線に爪形文が施されており、10・11には口縁部に条線文がみられる。17・18も同一個体で興津式土器である。19～21も同じく条線文が施されているが、20・21が同一個体である。22・23は波状爪形文をもつ土器である。

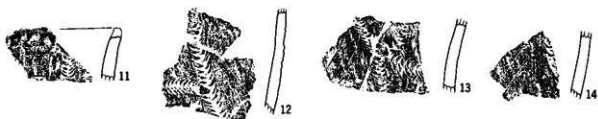
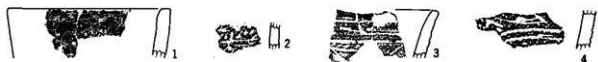
第Ⅳ群土器 縄文時代前期末～中期初頭の土器（24～40）

本群は前期末から中期初頭に比定される土器で、五領ケ台式土器を中心とする。

24～28は結節縄文を施された前期末から中期初頭に比定される土器である。24は胎土に石英と長石を多



1号整穴状遺構



第32图 縄文土器(1)

く含み、口縁部上面に結節横回転の縄文と無節縄文が施され、口唇部に結節縄文が施される。25は口縁部に結節縄文で羽状に文様が施されており、口唇部にも縄文施文されている。26は結節縄文が施され、口唇部にも施文されている。27も同様で、28では結節縄文が不規則に施文されている。

29は羽状縄文を施した中期初頭に比定される土器である。胎土に白色レキを多く含み、口唇部と口縁部を分ける位置の沈線を境として羽状縄文を施す。

30～37は五領ケ台式土器である。30～32は同一個体で、沈線が平行あるいは波状に走り刺突文も施される。33～37も同一個体であるが、沈線が細密に施されている。胎土には石英と長石を含む。

38～40は五領ケ台式土器と同様の文様で細密沈線を施すものである。38は縦方向に細密に沈線、刺突文、綾線文が施される。39と40は、左に縄文が右に縦方向の綾線文が施される。

第V群土器 縄文時代中期前葉～中葉の土器 (41～53)

本群の土器は中期の前葉から中葉の阿玉台式土器及び加曾利E式土器と、その時期に比定される土器である。

41・42は阿玉台式土器である。41は波状沈線、角押文、円形刺突文が施されている。42は隆帯の上下に細い角押文が施されている。

43～49は加曾利E式土器である。43～45は口縁部である。口縁部に沈線で文様帯を区画し横方向への施文がみられる。46の口縁部文様帯は、隆起線と沈線により渦巻文となっている。47・48は胴部である。49は小型の浅鉢の口縁部であり、口唇部に縄文の施文がこないよう横方向の沈線で区切ってある。

50～53は横方向に縄文が施文されている土器である。50は、中期の土器のなかでも細かい縄文が施されている。51・52は同一個体で、53は別個体である。

第V群土器 縄文時代後期の土器 (54～82)

本群の土器は後期前葉の堀之内式土器、後期中葉の加曾利B式土器、後期後葉の安行2式土器に比定される土器である。加曾利B式土器には粗製土器が目立つが、薄手の精製土器も見られる。

54・55は条線文が施されているものであり、後期前葉の堀之内1式土器と見られる。

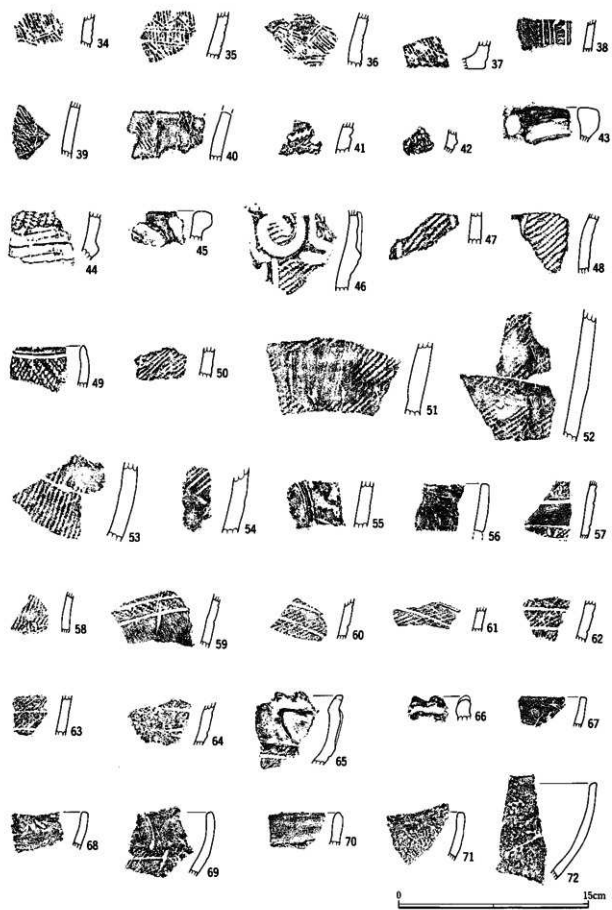
56は無文の土器であるが、本遺跡から検出された他の縄文土器と焼成や土器断面の厚さを比較し、この時期に該当するものと考えられる。

57～70は加曾利B式土器の精製土器である。57・58は同一個体で、横位沈線と縄文が施され、縄文の紋様のなかに刺突文が組み合わされている。59～64も横位沈線と縄文が施されているが、60・61・63は無節縄文である。65～70は鉢である。65～69は同一個体であり、口縁部は波状口縁で外反している。そのすぐ下に隆帯が貼られ、無節縄文、沈線と紋様が続く。

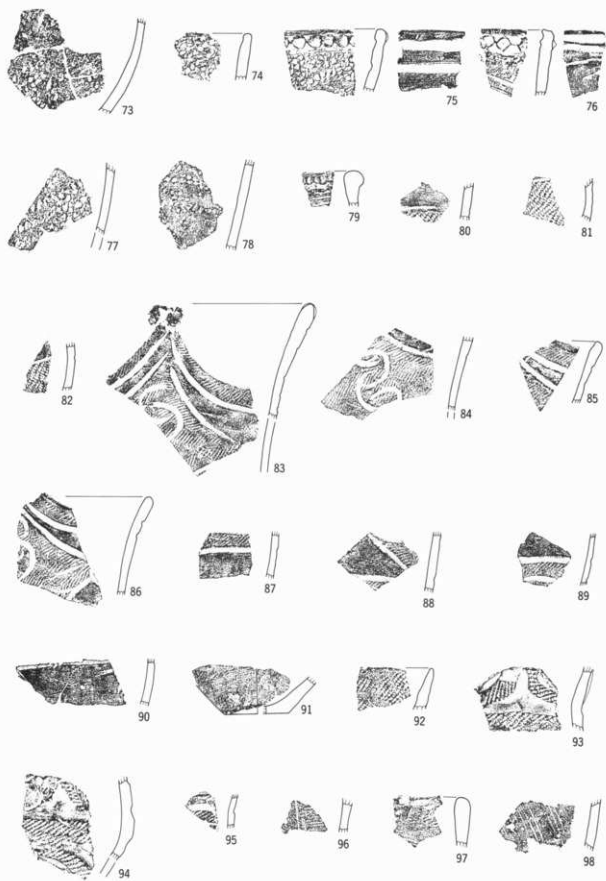
71～73は縄文のみ施文された土器であり、堀之内式土器から加曾利B式土器の時期に比定されるものである。71は口縁上部で文様が波状にまわる。72・73は胴部で全面に施文されている。

74～78は加曾利B式土器の粗製土器であり、いずれも紐線文で施文されている。74は上部が欠けているため内部に1本の沈線しかみられないが、75・76は口唇部に刻目突帯文をもち、内部に2本横位の沈線がみられる。さらに76では外面にも斜めに沈線が施されている。77・78は胴部で全面に縄文が施されている。

79～82は粗製土器であり、79は口縁部に紐線文がまわる。80～82は横位沈線の下に縄文を施した土器で、胴部にあたる。後期末の加曾利B式土器から安行式土器のものともみられる。



第33圖 縄文土器（2）



第34図 縄文土器 (3)

第VI群土器 縄文時代晩期の土器 (83~98)

本群の土器は、前浦式土器、安行3式土器及び、姥山Ⅱ式土器に比定される土器である。

83~91は姥山Ⅱ式土器の深鉢1個体分である。復元実測するには到らず、拓本で示した。口縁部の突起は44単位以上で、底径は5.0cmであった。胴部上半分には沈線で区切って縄文を施し、無文の部分もよく磨かれており、下半分は無文であった。内面も全てよく磨かれていた。

92~94は前浦式土器である。92は鉢の口縁部であり、口唇部まで施文されている。93・94は胴部で、縄文を地文として太い沈線を組み合わせ文様を構成している。

95は安行3式土器である。92~94の前浦式土器と同じように、縄文を太い沈線で区切って文様を作っている。薄手であるが内面がよく磨かれている。

96~98は条線で文様を作っている土器である。96は細条線と磨消部があり、97・98は斜め方向に条線文が施されている。

2 古墳時代 (第35図~第39図)

遺構外の遺物としては、調査区南東端に位置する中世以降の堅穴状遺構及び溝のうち、2号堅穴状遺構及び5号堅穴状遺構付近から1000点をこえる埴輪片を検出した。総重量では18.09kgに及ぶ。これは、本遺跡の南東に隣接する山田宝馬にわたり塚古墳からの埴輪片が道路建設に伴い流れ込んだものとみられる。

ここで取り上げる埴輪片は、南調査区の南東端に位置する中世以降の遺構である2号~5号までの堅穴状遺構、土坑及び溝から検出されたものである。そこで遺構にとらわれず、全ての埴輪片を胎土・焼成・粘土紐の巻き上げ方向・調整の方法・透孔・突帯に注目し観察した。特に刷毛目の太さについては2cmあたりの刷毛目の本数を測定し、本数が異なる場合は最大と最小の2カ所を測定し(最大値-最小値/2cm)と記述する¹⁾。

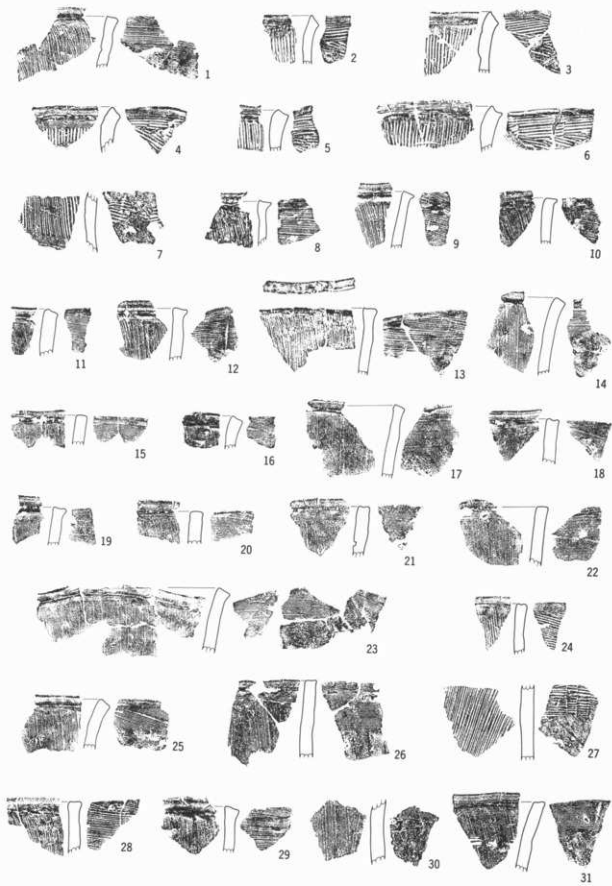
第35図1~第38図80は、円筒埴輪の口縁部付近である。浅間台遺跡出土の円筒埴輪の後円部付近の調整方法はほぼ同一の傾向が見られ、外面はタテ方向の刷毛目、内面は全体をナデにより器面を整えた後ヨコ及びナメ方向の刷毛目による調整を施している。いずれも焼成は良好で、色調は明褐色である。刷毛目の太さは内外面で計測し、特に記述の無いものは計測不能な場合である。

第35図1~26はいずれも外面にタテ方向、内面はヨコ方向の刷毛目による器面調整が見られる。

1は胎土には砂粒及び粘土粒を含み、粘土紐の巻き上げは右方向である。刷毛目の太さは外面で16-14本/2cm、内面で16本/2cmである。2は胎土には砂粒及び粘土粒を含み、粘土紐の巻き上げは左方向となっている。また、刷毛目の太さは内外面とも8本/2cmである。3は胎土には砂粒及び粘土粒を含み、粘土紐の巻き上げは右方向である。刷毛目の太さは内外面とも8本/2cmである。4は胎土には砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは内外面とも8本/2cmである。5は胎土に砂粒を含み、粘土紐の巻き上げは右方向である。刷毛目の太さは外面で9本/2cm、内面で8本/2cmである。6は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、粘土紐の巻き上げは左方向である。また、刷毛目の太さは外面で11-8本/2cm、内面で8本/2cmである。7は胎土に砂粒及び粘土粒を含み粘土紐の巻き上げは左方向である。また、刷毛目の太さは外面で14-11本/2cm、内面で8本/2cmである。

8は外面にタテ方向、内面はヨコ方向の刷毛目による器面調整は同様であるが胎土に粘土粒は含まれず、粘土紐の巻き上げは左方向である。また、刷毛目の太さは外面で14本/2cm、内面で16本/2cmである。

9は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、粘土紐の巻き上げは左方向である。刷毛目の太さは外面で17本/2cm、



0 15cm

第35図 円筒埴輪 (1)

内面で14本/2cmである。10は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、粘土紐の巻き上げは右方向となっている。刷毛目の太さは外面で14本/2cmである。11は胎土に砂粒及び粘土粒を含む。刷毛目の太さは内面で21本/2cmである。12は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、粘土紐の巻き上げは左方向である。刷毛目の太さは外面で17-16本/2cm, 内面で14本/2cmである。13は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは外面で16-15本/2cm, 内面で17本/2cmである。

14は外面にタテ方向, 内面はヨコ方向の刷毛目による器面調整は同様であるが胎土には砂粒のみ含まれる。また、粘土紐の巻き上げ方向は右方向である。また、刷毛目の太さは外面で25本/2cm, 内面で22本/2cmである。

15は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは外面で27-19本/2cm, 内面で22本/2cmである。16は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは外面で21本/2cmである。17は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、粘土紐の巻き上げは左方向である。刷毛目の太さは外面で25-21本/2cm, 内面で23本/2cmである。18は胎土に砂粒及び粘土粒を含む。刷毛目の太さは外面で18本/2cm, 内面で26本/2cmである。19は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは内外面とも22本/2cmである。

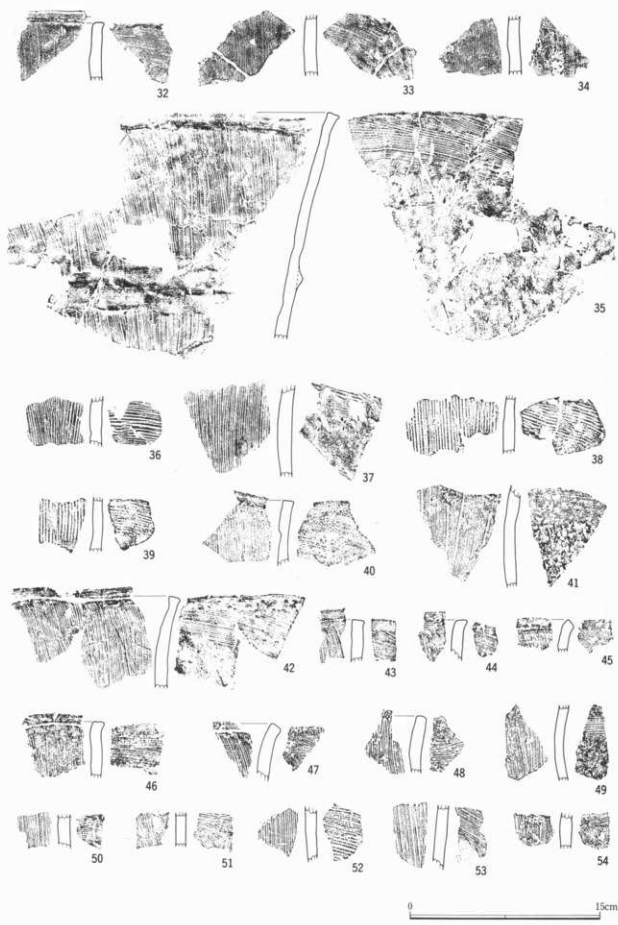
20は外面にタテ方向, 内面はヨコ方向の刷毛目による器面調整は同様であるが胎土に見られるのは砂粒のみである。また、刷毛目の太さは外面で25本/2cm, 内面で23本/2cmである。

21は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、粘土紐の巻き上げは右方向である。刷毛目の太さは内外面とも21本/2cmである。22は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは外面で21-18本/2cmである。23は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、粘土紐の巻き上げは左方向である。刷毛目の太さは外面で23-21本/2cm, 内面で22本/2cmである。24は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、粘土紐の巻き上げは右方向である。刷毛目の太さは内外面とも12本/2cmである。25は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは外面で24本/2cm, 内面で20本/2cmである。26は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、粘土紐の巻き上げは右方向である。刷毛目の太さは外面で25-21本/2cm, 内面で24本/2cmである。

27は外面にナナメ方向, 内面はヨコ方向の刷毛目による器面調整である。胎土に砂粒及び粘土粒を含み、粘土紐の巻き上げは左方向である。刷毛目の太さは外面で15-12本/2cm, 内面で12本/2cmである。

28-31は外面にタテ方向, 内面はヨコ方向の刷毛目による器面調整である。28は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、粘土紐の巻き上げは左方向である。刷毛目の太さは外面で16本/2cm, 内面で14本/2cmである。29は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、粘土紐の巻き上げは左方向である。刷毛目の太さは外面で12本/2cm, 内面で15本/2cmである。30は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、粘土紐の巻き上げは右方向である。刷毛目の太さは外面で20本/2cmである。31は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、粘土紐の巻き上げは左方向である。刷毛目の太さは外面で19本/2cm, 内面で24本/2cmである。

第36図32-37は外面にタテ方向, 内面はヨコ方向の刷毛目による器面調整である。32は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは外面で25本/2cm, 内面で23本/2cmである。33は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは外面で24本/2cm, 内面で23本/2cmである。34は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、粘土紐の巻き上げは左方向である。刷毛目の太さは外面で20本/2cmである。35は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、粘土紐の巻き上げは右方向である。刷毛目の太さは外面で19-15本/2cm, 内面で15本/2cmである。わずかに見られる突帯の断面形は△状であり、突帯から口縁端部までは13.5cmである。36は胎土に砂流及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは外面で16-11本/2cm, 内面で10本/2cmである。37は砂粒及び



第36圖 円筒埴輪（2）

粘土粒を含み、粘土紐の巻き上げは左方向である。刷毛目の太さは外面で16-13本/2cm、内面で10本/2cmである。

38・39は外面にタテ方向、内面はナナメ方向の刷毛目による器面調整である。38は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、粘土紐の巻き上げは左方向である。刷毛目の太さは外面で12-10本/2cm、内面で12本/2cmである。39は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、粘土紐の巻き上げは左方向である。刷毛目の太さは外面で9本/2cm、内面で10本/2cmである。

40-51は外面にタテ方向、内面はヨコ方向の刷毛目による器面調整である。40は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、粘土紐の巻き上げは左方向である。刷毛目の太さは外面で18-15本/2cmである。41は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、粘土紐の巻き上げは左方向である。刷毛目の太さは外面で26-21本/2cm、内面で22本/2cmである。42は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、粘土紐の巻き上げは左方向である。刷毛目の太さは外面で21本/2cm、内面で11本/2cmである。43は胎土に砂粒及び粘土粒を含む。刷毛目の太さは内面で23本/2cmである。

44・45・47は外面にタテ方向、内面はヨコ方向の刷毛目による器面調整は同様であるが胎土は砂粒のみ顕著に見られる。44の刷毛目の太さは外面で26本/2cm、内面で23本/2cmである。45の刷毛目の太さは外面で13本/2cmである。47の刷毛目の太さは外面で14本/2cmである。

46は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、粘土紐の巻き上げは左方向である。刷毛目の太さは外面で18本/2cm、内面で14本/2cmである。48は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは外面で13本/2cm、内面で14本/2cmである。49は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは外面で17本/2cm、内面で12本/2cmである。50は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは外面で16本/2cmである。51は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、粘土紐の巻き上げは左方向である。刷毛目の太さは外面で14本/2cmである。

52・53は外面にタテ方向、内面はナナメ方向の刷毛目による器面調整である。52は胎土には砂粒の混入のみ見られる。刷毛目の太さは外面で16本/2cm、内面で13本/2cmである。53は胎土には砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは内外面とも16本/2cmである。

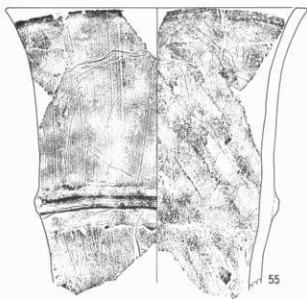
54は外面にタテ方向、内面はヨコ方向の刷毛目による器面調整である。胎土に砂粒及び粘土粒を含み、粘土紐の巻き上げは左方向である。刷毛目の太さは外面で17本/2cmである。

第37図55は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、粘土紐の巻き上げは右方向となっている。刷毛目の太さは外面で34-22本/2cm、内面で23本/2cmである。また、突帯の断面形は台形状であり、突帯から口縁端部まで14.1cm、遺存部分から推定される口縁部径は24cmである。

第37図56-39図の97は円筒埴輪の第2段ないし第3段部分である。外面はタテ方向の刷毛目による器面調整が基本で、内面は粘土紐の輪積みを平らにならした際のナデのままである。観察に当たっては胎土や器面の調整、突帯の断面形や透孔についても注意を払い、刷毛目の太さは外面で計測し、特に記述の無いものは計測不能な場合である。

第37図56・57は粘土紐の巻き上げは右方向である。56は胎土に砂粒を含み、刷毛目の太さは9本/2cmである。57は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは22本/2cmである。透孔は楕円状にやや垂んでいる。

58-65は粘土紐の巻き上げは左方向である。58は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは23本/2cmである。59は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは14本/2cmである。60は胎土に砂粒



55



56



57



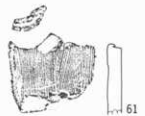
58



59



60



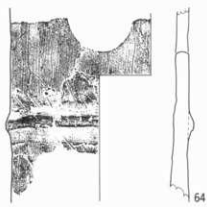
61



62



63



64



65



66



67



68



69



第37图 円筒埴輪 (3)

及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは15本/2cmである。透孔は楕円形でやや粗い仕上げとなっている。61は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは22-17本/2cmである。透孔は楕円形で面取り部分の仕上げが粗いつくりとなっている。62は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは10本/2cmである。透孔は円形で面取り部分も比較的丁寧なつくりである。63は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは22本/2cmである。64は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは25本/2cmである。突帯の断面は頂部の緩やかな三角形である。65は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは16本/2cmである。

66は器面の調整および胎土の含有物は同様であるが、粘土紐の巻き上げは右方向である。また、刷毛目の太さは10本/2cmである。67は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは16本/2cmである。

68は粘土紐の巻き上げは左方向である。胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは25本/2cmである。69の刷毛目の太さは17本/2cmである。

第38図70・71は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、突帯の断面は三角形である。70の刷毛目の太さは24-22本/2cmであり、71の刷毛目の太さは17-15本/2cmである。

72・74は粘土紐の巻き上げは右方向である。72は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは17本/2cmである。突帯の断面は頂部の低い裾の広い三角形である。74は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、突帯の断面は頂部の低い小振りな三角形である。

73・75は粘土紐の巻き上げは左方向である。73は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは22本/2cmである。75は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、突帯の断面は三角形である。刷毛目の太さは17本/2cmである。

76・77は粘土紐の巻き上げは右方向である。76は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは17-14本/2cmである。突帯の断面は裾は広いが頂部の盛り上がり小さい三角形である。77は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、突帯の断面は頂部の低く平坦な台形状である。

78・79は粘土紐の巻き上げは左方向である。78は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは16本/2cmである。突帯の断面は頂部の尖った三角形である。79は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは18-14本/2cmである。突帯の断面は頂部の低い三角形である。

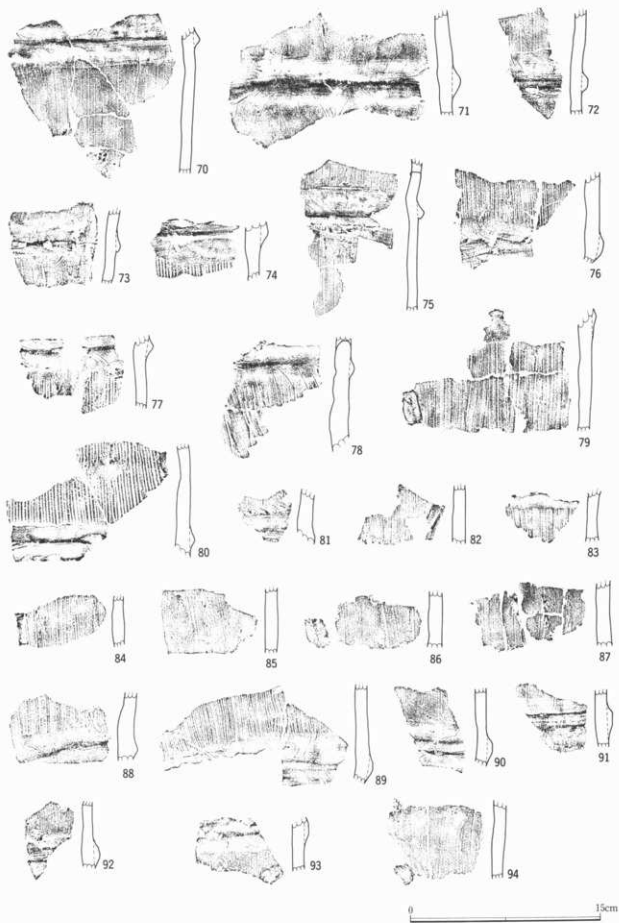
80は粘土紐の巻き上げは右方向である。胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは16本/2cmである。突帯の断面は頂部の低い三角形である。

81・82は粘土紐の巻き上げは左方向である。81は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、突帯の断面は頂部の尖った三角形である。82は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは21本/2cmである。

83・84は粘土紐の巻き上げは右方向である。83は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは19本/2cmである。84は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは15-9本/2cmである。

85-90は粘土紐の巻き上げは左方向である。85は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは23-16本/2cmである。86・87・88は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さはいずれも17本/2cmである。89は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、突帯の断面は頂部の尖った裾の広い三角形である。90は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは16本/2cmである。突帯の断面は頂部の狭い台形状である。

91・92は粘土紐の巻き上げは右方向である。91は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、突帯の断面は裾の広い台形状である。92は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、突帯の断面は頂部の低く幅の広い台形状である。刷毛目の太さは17本/2cmである。



第38図 丸筒埴輪 (4)

93～第39図96は粘土紐の巻き上げは左方向である。93は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、突帯の断面は頂部の狭い台形状である。94は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは17本/2cmである。突帯の断面は頂部の低く幅の広い台形状である。

第39図95は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは外面で28-25本/2cmである。突帯の断面は頂部の高い幅の狭い台形状である。96・97は粘土紐の巻き上げは右方向である。96は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは20本/2cmである。突帯の断面は頂部の低い小振りな三角形である。97は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは24-22本/2cmである。突帯の断面は頂部の低く幅の広い台形状である。

98～113は円筒埴輪の基部である。いずれの基部も基底部に網代様の圧迫痕が見られる。また、第4段口縁部内面上端と同様にヨコ方向の刷毛目のあるものがある。刷毛目の計測は内外面を観察し、記述の無いものは測定不能の場合である。

98は外面はタテ方向、内面の最下部にはヨコ方向のそれぞれ刷毛目が見られ、粘土紐の巻き上げは左方向である。胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは外面が19本/2cm、内面が10本/2cmである。

99は外面はタテ方向、内面の最下部にはヨコ方向の刷毛目が見られ、粘土紐の巻き上げは右方向である。胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは外面が9本/2cm、内面が11本/2cmである。

100～104は外面にタテ方向の刷毛目がみられ、粘土紐の巻き上げは左方向である。100は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは9本/2cmである。101は胎土に砂粒を含み、刷毛目の太さは15本/2cmである。102は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは23本/2cmである。103は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは22本/2cmである。104は胎土に砂粒及び粘土粒を含む。

105は粘土紐の巻き上げは右方向である。胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは22本/2cmである。106は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは13本/2cmである。107は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは22本/2cmである。

108～111は粘土紐の巻き上げは左方向である。108は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは22本/2cmである。109は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは23本/2cmである。また、基底部から第2段との境となる突帯まで10.5cmである。110は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは18-16本/2cmである。111は胎土に砂粒及び粘土粒を含み、刷毛目の太さは15-12本/2cmである。

112・113は胎土に砂粒及び粘土粒を含む。113は刷毛目の太さは14本/2cmである。

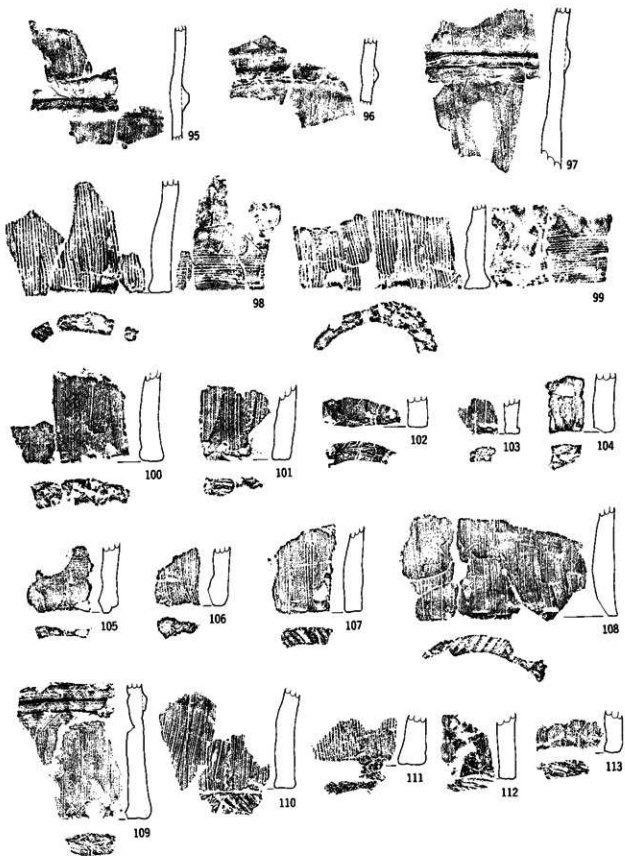
これらの遺物は、出土位置から判断すれば隣接した山田宝馬古墳群のにわとり塚古墳出土埴輪と関連して検討を要するものである。

3 奈良平安時代から中世

第31図11・12の2点は奈良平安時代から中世の遺物である。11はメノウ製の火打ち石と思われる。断面三角形の形状を呈し、稜は潰れてしまっている。12は凝灰岩製の砥石である。

注1 轟 俊二郎 1972「埴輪研究」第1冊における埴輪分析の視点を参考とした。

轟は、円筒埴輪の刷毛目について、刷毛目の「単位」という表現で工具の幅と理解することに疑問を提起している。刷毛目を付ける際に少しずつ重複しながら工具をずらしていくことを考慮すれば、この表現で工具幅とすることの危険性を指摘したものである。



第39圖 円筒埴輪 (5)

また、轟はここで刷毛目痕を残した工具の特徴を把握する方法として2 cm当たりの刷毛目の本数を測る際に、最大値と最小値の測定を試みている。これにより工具の使用部分による刷毛目の太さの違いを考慮しても、ある程度工具の特徴を引き出すことが可能となるとの考えからである。本報告書では、こうした轟の刷毛目に対する分析の視点を参考に、円筒壇輪の外面だけでなく内面に刷毛目のあるものについても計測し併せて記述した。

第4章 まとめ

旧石器時代では、石器集中地点が11Hグリッドに1か所検出され、石器類の出土層位はⅢ層上半である。

石器群は黒曜石製の小型尖頭器を特徴とする。剥片・砕片を多量に伴うが、石核や素材剥片がほとんど見られないことから、素材となる剥片生産は別のところで行われたと考えられる。よって本遺跡では、素材剥片若しくはほぼ完成品に近いものを搬入し、若干の整形を施したものと考えたい。黒曜石は白い斑帯が比較的多くはいるが、粗悪なものとはいえないものである。

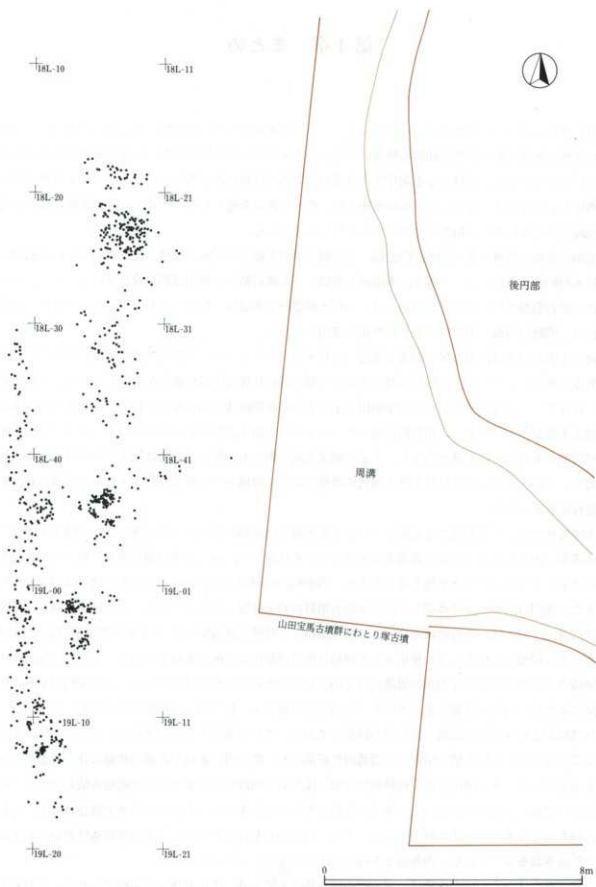
成田市東峰西笠峰遺跡（空港№63遺跡）や大網白里町大網山田台№1遺跡、流山市桐ヶ谷新田遺跡、印西市木刈峠遺跡第10ユニット等で、本遺跡と類似した黒曜石製の小型尖頭器が検出されている。しかし、それらの石器群に伴うナイフ形石器には、石材・形態的に本遺跡と類似したものはない。現段階での比較検討は、黒曜石の原産地分析とともに今後の課題としたい。

縄文土器の分布は南調査区に顕著である。11H・12Hグリッドの1号竪穴状遺構は調査区内の検出部分が限定されているため出土点数は少ないものの中期加曾利EⅣ式土器の破片が出土している。これに対して、14Jグリッド付近では縄文時代早期田戸下層式から晩期前浦式土器及び安行3式土器まで時間差のある縄文土器が出土しており、相対的に他のグリッドよりも出土点数が多くなっている。14Jグリッドには2号円墳や6号溝・7号溝が存在し、上記の縄文土器の中でも中期から後期に比定される縄文土器の比率が高い。このことから古墳時代や歴史時代の遺構によって破壊された縄文時代中・後期の遺構の存在した可能性が考えられる。

古墳時代では、3号墳及び4号墳について本報告書では別個の古墳として記述した。方墳とした3号墳の周溝が、円墳である4号墳の周溝を埋め立てている状況から、同一古墳の墳形調整工程あるいは墳形修正の結果として検討すべき余地も残されるが、調査範囲が限定されることから今後の検討課題としたい。

また、浅間台遺跡は南に隣接して山田宝馬古墳群にわたり塚古墳が存在する。調査区南東端に位置する中世以降の7号土坑、4号溝状遺構、5号溝状遺構、2号竪穴状遺構及び5号竪穴状遺構付近では1,000点をこえる埴輪片を検出した。検出された埴輪は円筒埴輪片が圧倒的多数を占める。にわたり塚古墳の円筒埴輪の出土位置は後円部西側の周溝付近と前方部との境のくびれ部付近である。第43図円筒埴輪出土状況図によれば、分布の状況が北東方向から南西方向に幅2m、長さ10mの範囲で帯状になっている。この辺りにはにわたり塚古墳の周溝上に町道が位置しており、これと並行する状況で散布していることがわかる。このことにはにわたり塚古墳の墳丘から周溝内に転落した一群の円筒埴輪が道路の整備に伴い移動した可能性を示している。本遺跡出土の円筒埴輪片は第一段から第四段口縁部まですべて輪積み成形である。刷毛目については、2cm当り8ないし9本という粗いものから34本という細かいものまで確認された。しかし概ね16本から22本ほどの間に収束される。また、内外面ともに刷毛目を有する円筒埴輪片はいずれも近似した単位本数を示しており、内外面とも同一の工具を使用した可能性が高い。

奈良平安時代から中世の遺構は、竪穴状遺構5基、土坑8基、溝状遺構8条が検出された。これらの遺構から出土した遺物はいずれも小破片のため図化できなかつたが、覆土の土層観察からは大きな攪乱は認められず、いずれも残留した遺物の年代と大きな差は無いものと考えられる。



第40図 円筒埴輪出土位置図

写 真 图 版

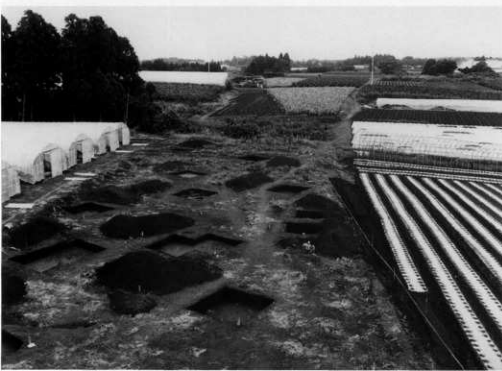




北調査区遠景
(南より)



南調査区遠景
(南より)



確認調査状況
(北より)



遺構検出状況
(南より)



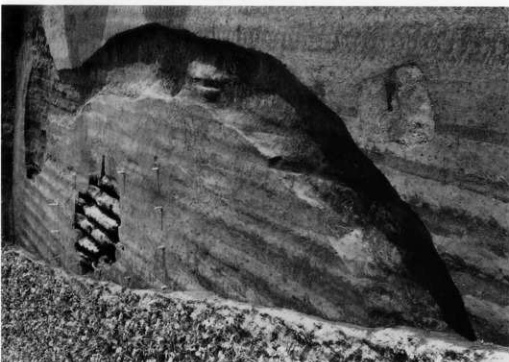
旧石器時代土層断面
(東より)



石器集中地点
(南より)



1号竪穴状遺構全景
(南東より)



1号墳全景
(北より)



1号墳埋葬施設検出状況
(北西より)

1号墳埋葬施設掘方
(北西より)



1号墳周溝土層断面
(北西より)



2号墳全景
(東より)





2号墳遺物出土状況
(東より)



2号墳周溝土層断面
(北より)



3号墳全景
(南東より)

3号墳埋葬施設検出状況
(南東より)



3号墳石棺
(南東より)



3号墳周溝土層断面
(南東より)





3号墳鉄線出土状況
(北東より)



4号墳・5号土坑・2号溝状遺構全景
(南より)



4号墳周溝土層断面
(西より)



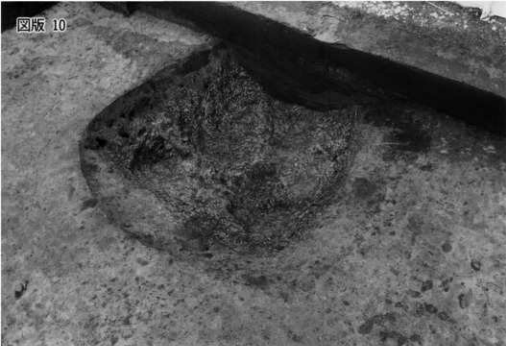
1号土坑全景
(北より)



2号土坑全景
(南西より)



3号土坑全景
(西より)



4号土坑全景
(北より)

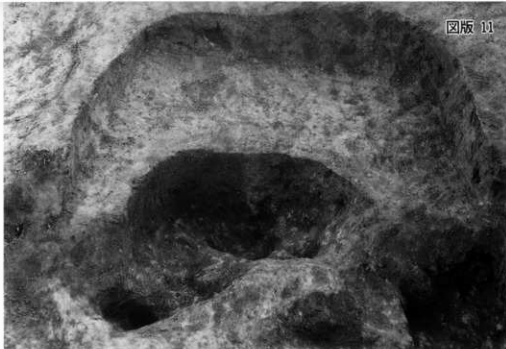


2~5号堅穴状遺構遠景
(南より)



2号堅穴状遺構全景
(北東より)

3号竪穴状遺構全景
(西より)



4号竪穴状遺構全景
(南より)



5号竪穴状遺構全景
(東より)





6号竖穴状遺構全景
(西より)



6号土坑全景
(北東より)



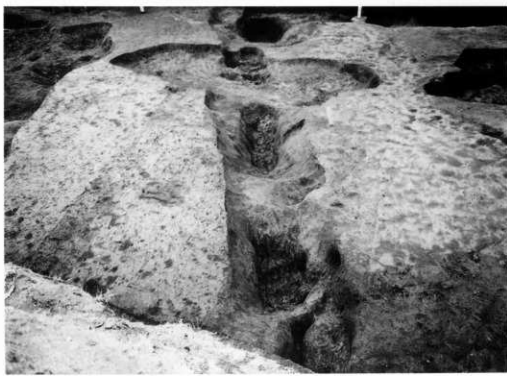
7号土坑全景
(南西より)



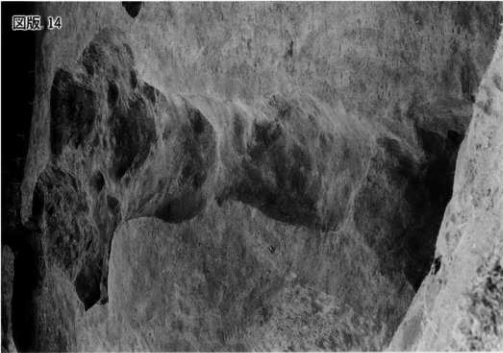
8号土坑・1号溝状遺構全景
(東より)



3号溝状遺構全景
(南より)



4号溝状遺構全景
(東より)



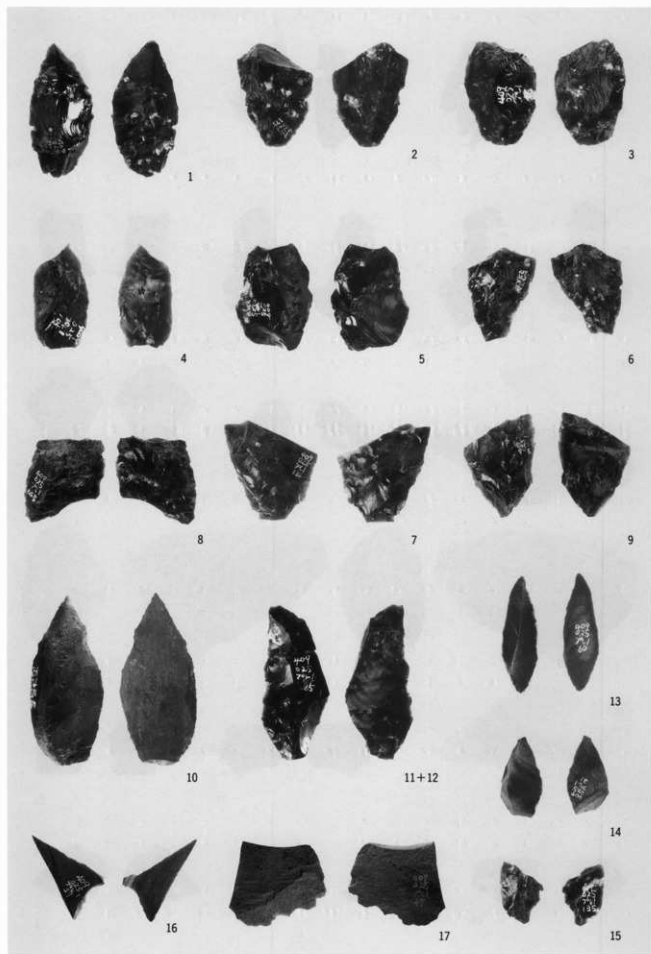
5号溝状遺構全景
(西より)



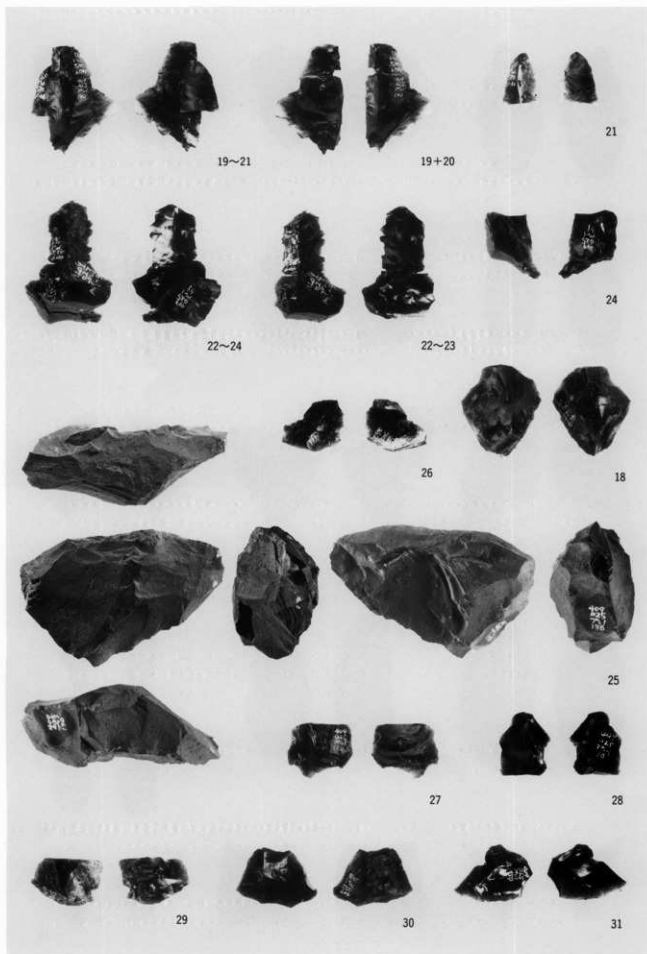
6号溝状遺構全景
(西より)



7号溝状遺構全景
(南東より)



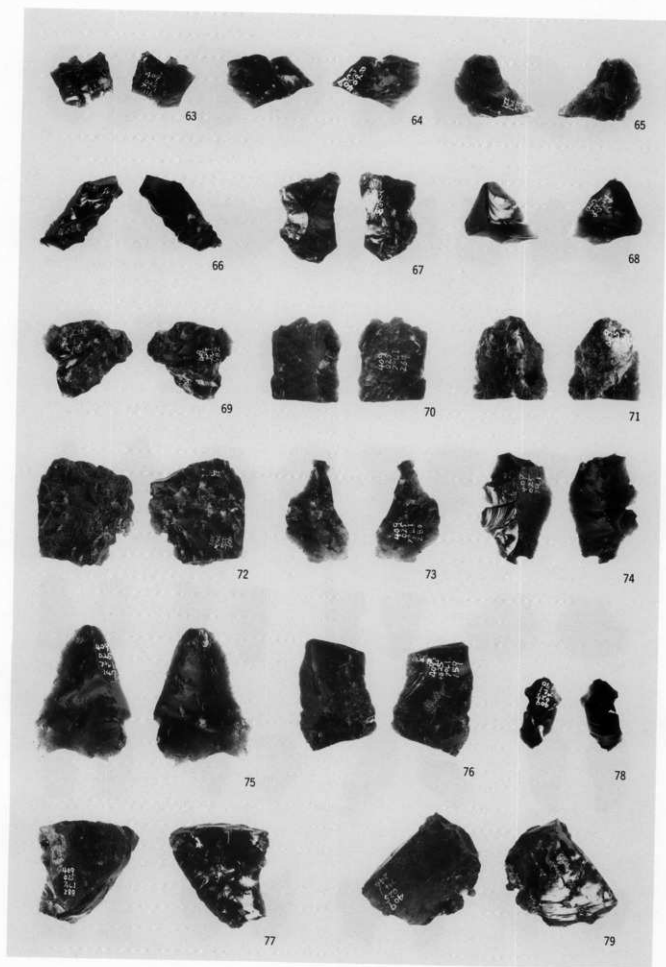
石器集中地点 出土石器(1)



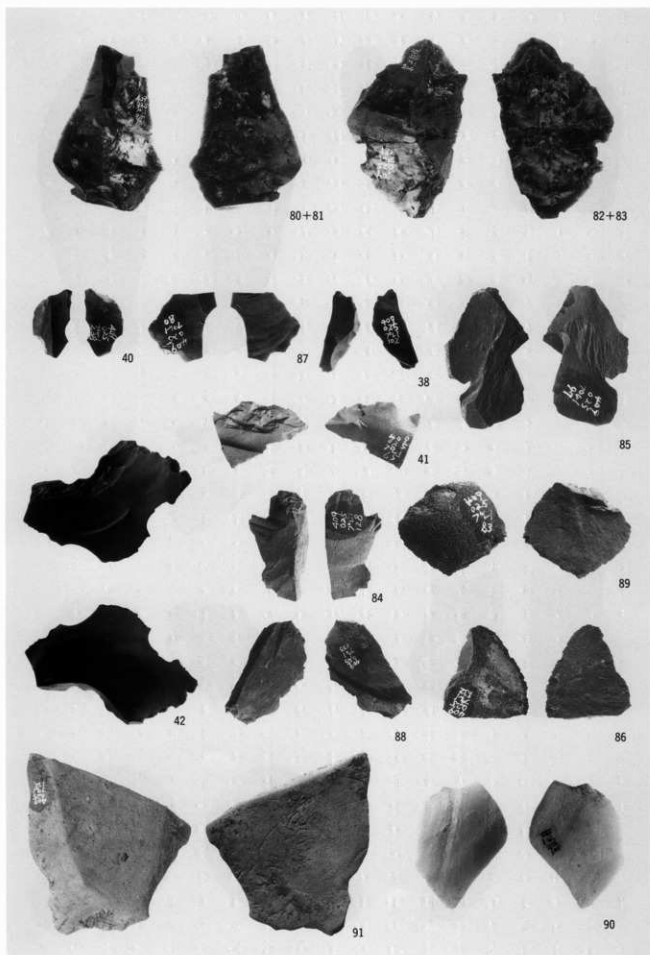
石器集中地点 出土石器(2)



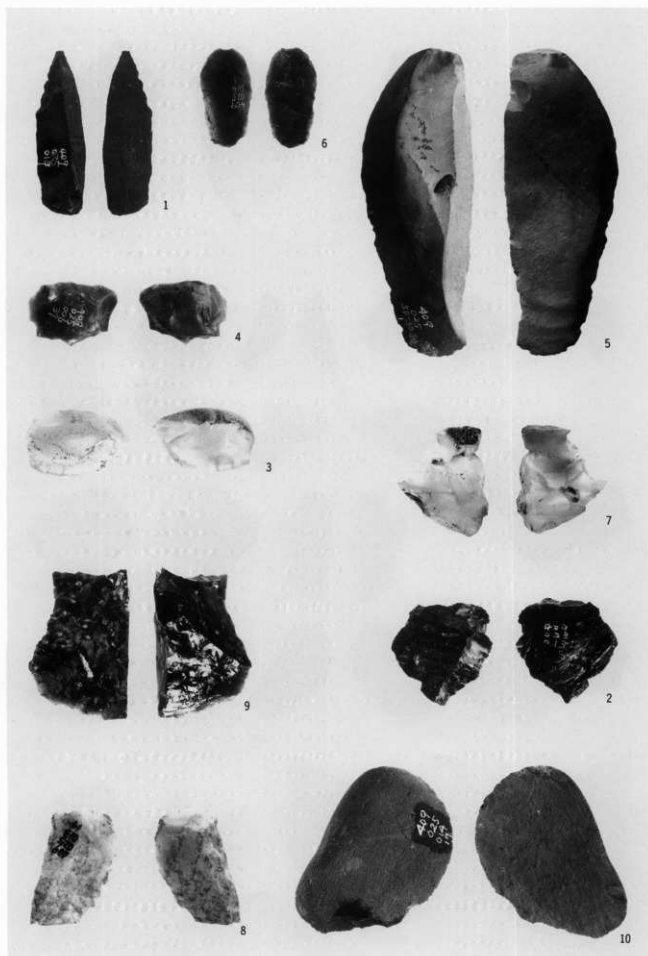
石器集中地点 出土石器 (3)



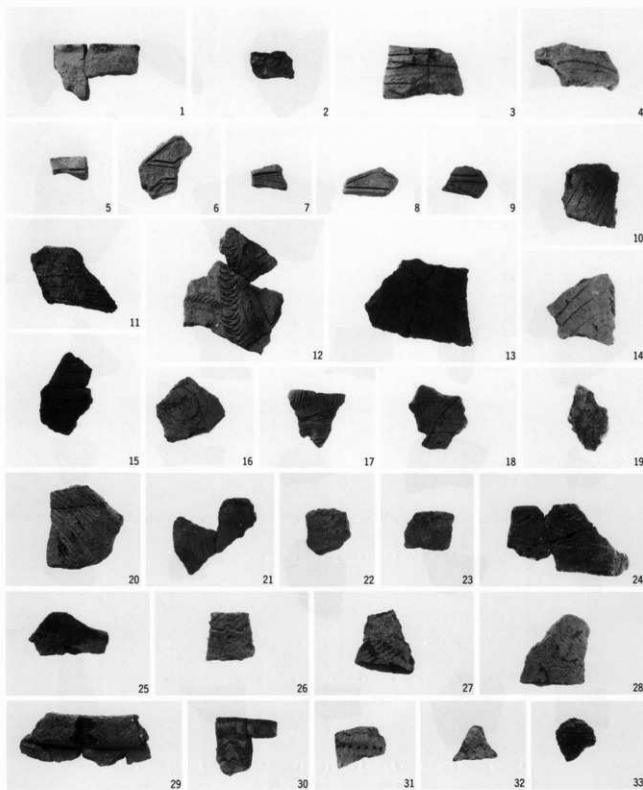
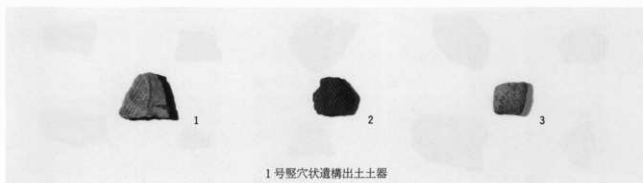
石器集中地点 出土石器 (4)



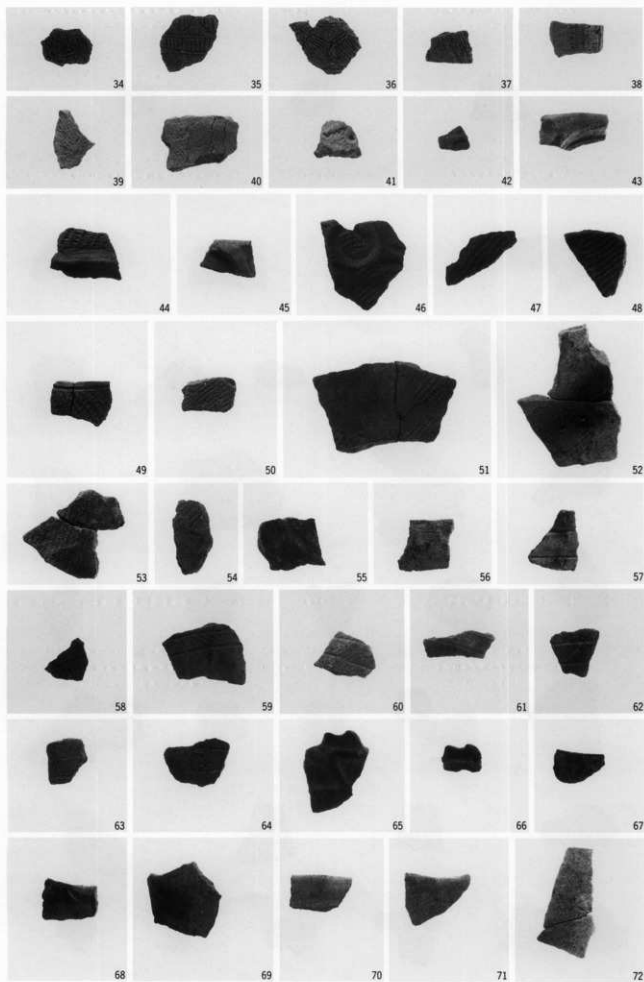
石器集中地点 出土石器(5)



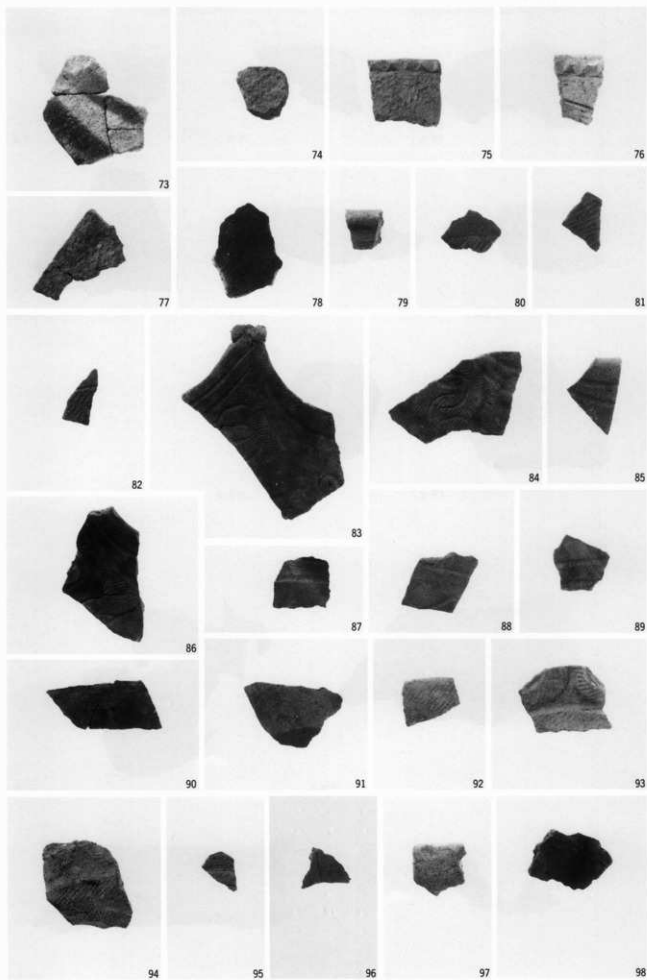
石器集中地点外 出土石器



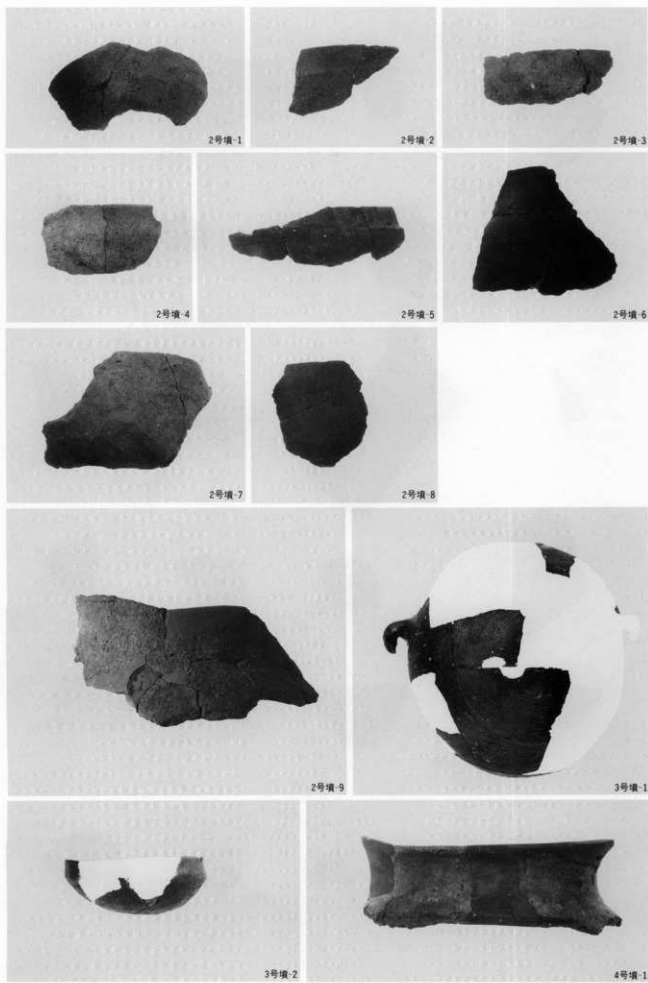
縄文土器 (1)



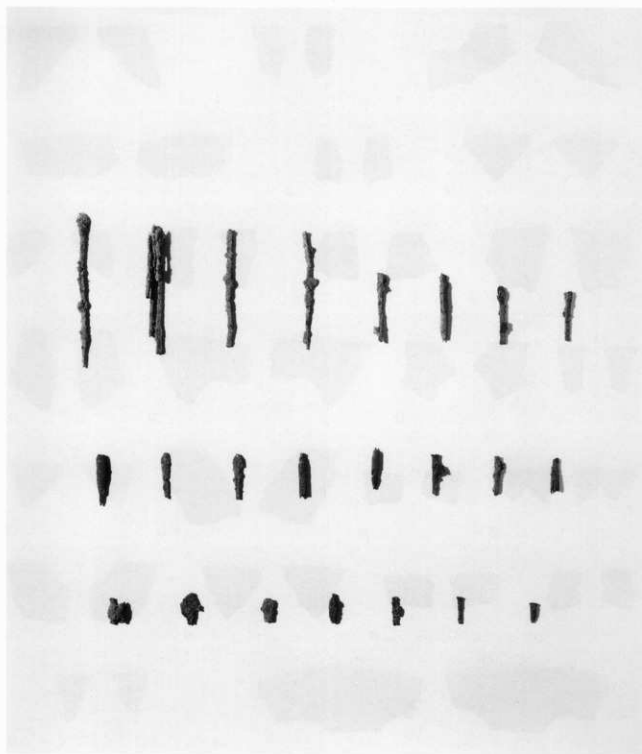
縄文土器 (2)



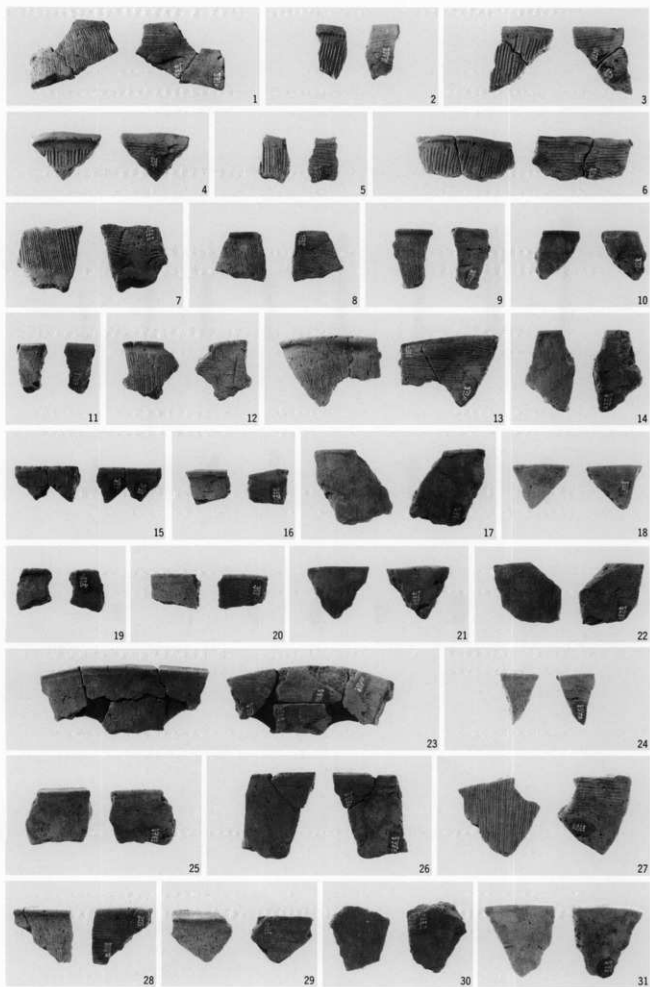
繩文土器 (3)



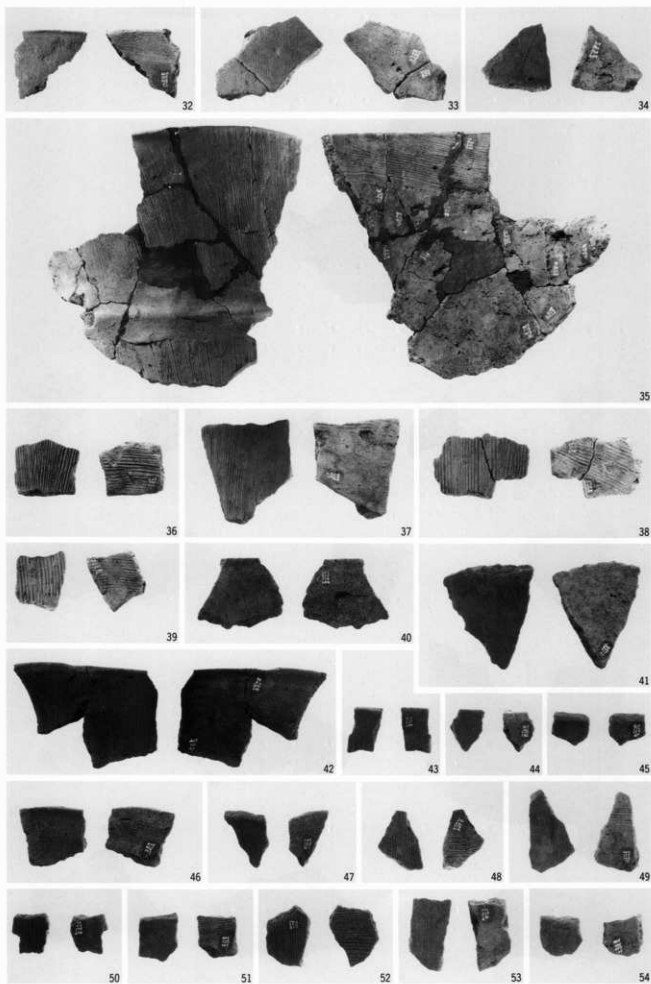
2号墳・3号墳・4号墳出土土器



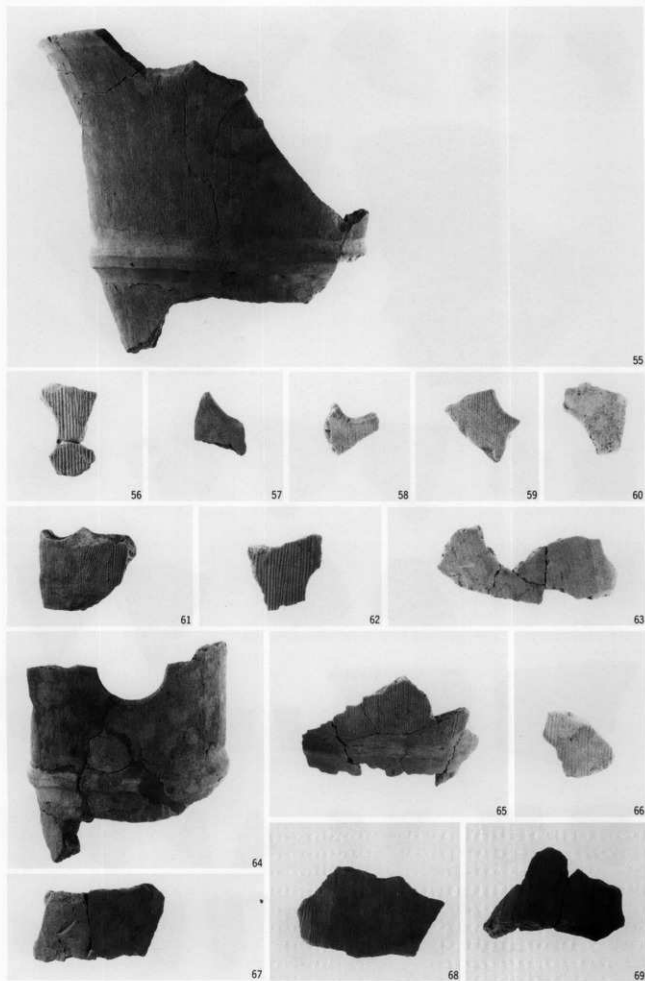
3号墳出土鉄錐



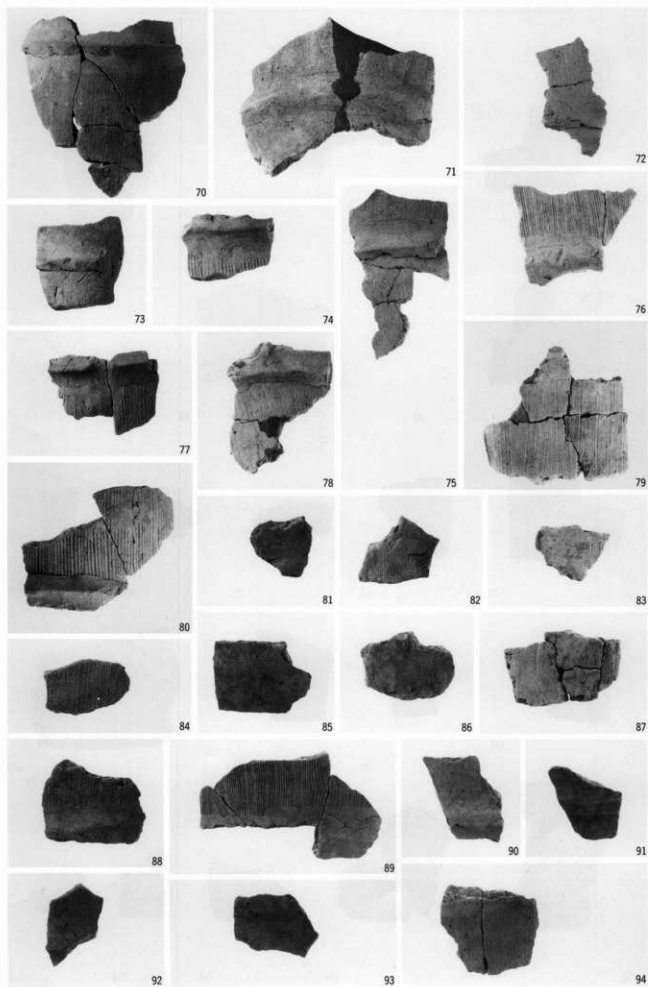
円筒埴輪 (1)



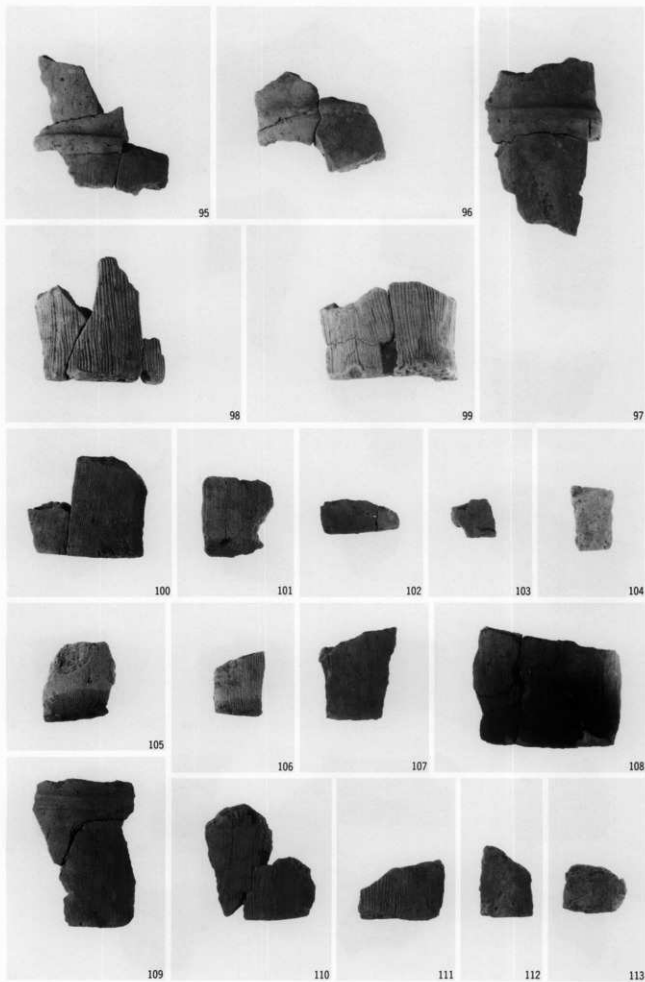
円筒埴輪 (2)



円筒埴輪 (3)



円筒埴輪 (4)



円筒埴輪 (5)

報告書抄録

ふりがな	しゅようちほうどうなりたまつおせん							
署名	主要地方道成田松尾線X							
副書名	芝山町浅間台遺跡							
巻次	X							
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第390集							
編著者名	廣瀬和之・石倉亮治							
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2 TEL043-422-8811							
発行年月日	西暦2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
浅間台 遺跡	千葉県山武郡芝山町高 田字浅間台273-4	409	025	35 42 32.7	140 24 21	19880901～ 19890131	4,700	主要地方 道成田松 尾線建設 に伴う事 前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
浅間台	石器 製作跡 集落跡	旧石器時代 縄文 奈良・平安 ～中世	石器集中か所 1か所	1	尖頭器、ナイフ形石器、剥 片、石核			
			竪穴状遺構 1か所	1	縄文式土器			
			土坑 溝状遺構	4条	土師器			
	墓	古墳	前方後円墳 円墳 方墳	1基 2基 1基	土師器、須恵器 鉄鏃、円筒埴輪片			

千葉県文化財センター調査報告第390集

主要地方道成田松尾線X

－芝山町浅間台遺跡－

平成12年3月31日発行

編 集	財団法人	千葉県文化財センター
発 行	千 葉 県	土 木 部
		千葉市中央区市場町1-1
	財団法人	千葉県文化財センター
		四街道市鹿渡809-2
印 刷	株式会社	正 文 社
		千葉市中央区都町2-5-5
